大淫婦バビロン
の倒壊
II
The fall of Babylon
the great
正道
SEIDOU

目次

全体の目次 …… 1

第四部

第12章　大淫婦バビロンについての記述 …… 4

第13章　大淫婦バビロンの眷属 …… 6

第14章　大淫婦バビロンの倒壊 …… 10

第五部

第15章　定年制度廃止の提言 …… 14

第16章　死後の生命の認知 …… 16

第17章　タナトスの社会的受容 …… 19

第六部

第18章　安楽死についての考察 …… 24

第19章　安楽死の事前申請 …… 28

第20章　愛の一元論 …… 32

第七部

第21章　残酷性の自覚 …… 36

第22章　ボトムアップ型の宗教 …… 39

第23章　円柱と半円柱 …… 43

第24章　贈る言葉 …… 47

全体の目次

はじめに

第一部

第1章 現職を否定する啓示
第2章 アレゴリー（寓話）
第3章 現象世界における不都合
第4章 この世界は誰のためのものか
第5章 命の価値の差異

第二部

第6章 現象としてのタナトス
第7章 霊的観点から見たタナトス
第8章 タナトスを正当化するもの

第三部

第9章 宗教としてのマルクス主義
第10章 マルクス教とタナトスの相克
第11章 純粋なファンダメンタリスト

第四部

第12章 大淫婦バビロンについての記述
第13章 大淫婦バビロンの眷属
第14章 大淫婦バビロンの倒壊

第五部

第15章 定年制度廃止の提言

第16章 死の受容
第17章 タナトスの社会的受容
第18章 安楽死についての考察
第19章 安楽死の事前申請
第20章 愛の一元論

第六部

第21章 残酷性の自覚
第22章 ボトムアップの宗教
第23章 円柱と半円柱
第24章 贈る言葉

第四部

第12章　大淫婦バビロンについての記述

自然の摂理に反した優しさ

老人介護の現場に見られる、経営者、看護師、ケアマネージャーたちによる原理主義は、部外者からすれば、大変に「優しいこと」のように見える。

しかし「生の絶対的肯定」に基づいたこの優しさは、明らかにマルクス教の影響を、強く受けたものである。

したがって有神論の宇宙（＝本物の宇宙）の中にあっては、それは自然の摂理に反していると言わざるを得ない。ゆえに彼らの優しさは「環境破壊的な優しさ」となる危険性を孕んでいることになる。

実際、この優しさは、それが発揮されればされるほど、結果的に、自然の摂理を破壊することになる。老人たちの延命は、現役世代の活力を吸い取り、社会全体の運営を継続困難にしていくということだ。

このように自然の摂理から乖離し、それを滅ぼす要因となる優しさを、黙示録のヨハネは「大バビロン」とか「大淫婦バビロン」と呼んだ。

というより、ここに「＝」が存在するということが、今回私に降りてきた、決定的な霊的啓示だったのである。つまり「介護業界の優しさ＝大淫婦バビロン」という明快な図式だ。そしてこの啓示が、私をして、本書『大バビロンの倒壊』を書かせたのである。

ともあれ、大淫婦バビロンについて書かれた『黙示録』の記述を見てみよう。それは次のようなものになる。

黙示録第十八章より

わたし〔ヨハネ〕は、大きな権威を持っている別の天使が、天から降ってくるのを見た。地上はその栄光によって輝いた。天使は力強い声で叫んだ。

「倒れた。大バビロンが倒れた。そして、そこは悪霊どもの住みか、あらゆる汚れた霊の巣窟、あらゆる汚れた獣の巣窟となった。

すべての国の民は、怒りを招く彼女のみだらな行いのぶどう酒を飲み、地上の王たちは、彼女とみだらなことをし、地上の商人たちは、彼女の豪勢なぜいたくによって富を築いたからである。」

わたしはまた、天から別の声がこう言うのを聞いた。

「わたしの民よ、彼女から離れ去れ。その罪に加わったり、その災いに巻き込まれたりしないようにせよ。彼女の罪は積み重なって天にまで届き、神はその不義を覚えておられるからである。

彼女がしたとおりに、彼女に仕返しせよ、彼女の仕業に応じ、倍にして返せ。彼女がそそいだ杯に、そ

の倍も注いでやれ。

彼女がおごり高ぶって、ぜいたくに暮らしていたのと、同じだけの苦しみと悲しみを、彼女に与えよ。彼女は心の中でこう言っているからである。

『わたしは、女王の座に着いており、やもめなどではない。決して悲しい目に遭いはしない』

それゆえ、一日のうちに、さまざまの災いが、死と悲しみと飢えとが彼女を襲う。

また、彼女は日で焼かれる。彼女を裁く神は、力ある主だからである。」

彼女とみだらなことをし、ぜいたくに暮らした地上の王たちは、彼女が焼かれる煙を見て、そのために泣き悲しみ、彼女の苦しみを見て恐れ、遠くに立ってこう言う。

「不幸だ、不幸だ、大いなる都、強大な都、お前はひとときの間に裁かれた。」

その後、わたしは、大群衆の大声のようなものが、天でこう言うのを聞いた。

「ハレルヤ。救いと栄光と力とは、わたしたちの神のもの。その裁きは真実で正しいからである。みだらな行いで地上を堕落させたあの大淫婦を裁き、ご自分の僕たちの流した血の復讐を、彼女になさったからである」

貶められるべき優しさ

ここに「介護業界の優しさ＝大淫婦バビロン」という隠された図式があるのだと仮定して、これからの叙述を始めていきたい。

してみると、まず何ゆえに彼女は、大淫婦などと呼ばれて貶められているのだろう。

それは第一に「彼女の優しさが、有神論の宇宙における、自然の摂理から乖離してしまっている」という事実に由来している。

そう、神はたしかに存在しており、ゆえに「有神論の宇宙」こそが、真実の世界のありようなのである。それにも関わらず、大淫婦バビロンの優しさは、明らかに「無神論の宇宙」を前提として発現している。

「死んだら無になってしまう。だから、老人が死んだら可哀そうではないか」

それが彼女の主張であり、彼女の優しさの基底にある世界観なのである。

その主張は声高なものではないかもしれない。彼女はただ優しく囁くだけかもしれない。

だがそうだとしても、彼女の感情の揺らぎは、無神論、唯物論、無霊魂説を基盤にして生み出されている。その点は疑いようもない。よって、それは生ける神からすれば、立派に「彼女を貶める理由」になるのである。

不当に賛美されている現状

第二に彼女が貶められるべき理由は、そうして神から離れているのにも関わらず、彼女が不当なまで

に周囲から讃えられていることである。

事実、介護業界の優しさは、柔和で温かい、いかにも聖女的なものとして讃えられている。すでに一度書いたことだが、介護士は、そうやって介護の仕事に就いているという事実だけで、もう周りからは「優しい人」というレッテルを贈ってもらえるのである。

だが、その優しさは前述したとおり、神の摂理から分断されたものであり、よって決して讃えられてはならないものである。

そうなのだ。むしろ彼女は、そのように讃えられなかったらよかったのだ。その讃仰こそは、まさに現代社会全体が、無神論に染まり切っていることの証拠なのだから。

であるならば、かかる賛辞は、それが大きなものになればなるほど、真実の世界から見たときの不当性を増し加えることになるだろう。

そうではないか。優しさが正当であるとは、その優しさがしっかりと神と繋がっているということに他ならないのだから。そして正当であってこそ、優しさだって、その本来的な意義と力を具えることになるのだから。

繰り返して言うが、老人介護に現れる優しさは、神の世界とは明らかに分断されてしまった優しさである。それは逆に、無神論の世界と共生している優しさである。

ならば彼女の優しさとは、結局のところは媚態なのではないか。本当の愛とは異なる、卑しいまでの媚なのではないか。まるで娼婦が、客を呼び込むために浮かべる笑みのような。

それゆえに、彼女の一見聖女のような優しさは、ヨハネの筆により、むしろ大いに淫らなものとして描かれることになる。

実際、それが誤って「聖女的な優しさ」として讃えられるならば、これを貶める言葉が「大淫婦の媚態」となったとしても無理はないのである。なにぶん黙示録のヨハネの語法は、つねに極端から極端へとジャンプするものだからである。

第13章　大淫婦バビロンの眷属

唯物的な驕り

マルクス教の影響下にある「大淫婦バビロン」への賛辞は、別の角度から見れば、物質文化の高まりの中から現れ出てきた賛辞に他ならない。

そして、この物質文化は、今や物質文明と呼んでもよいものとなっている。

それだけ文化の固着化が進んだということだが、この物質文明をさらに「唯物論的文明」と言い換えてもよいだろう。

そして、この唯物論的文明、物質文明こそが「バビロン」なのである。

聖書の『創世記』によれば、バビロンとは「レンガを積み重ねて、空の彼方まで聳えさせた塔」を擁した都の名前である。そして、その高塔「バベルの塔」は、神のまえに人間の高慢と驕りを示した記念碑だった。

レンガという物質を積み重ねて、天に届くほどの建造物を作る――ここに私は、霊性に背を向けた者たちの、まさに「唯物的な驕り高ぶり」を見ずにはいられない。

「彼女」がバビロンである理由

そして、これと同様な「霊性に背を向けた唯物的驕り」が老人介護の現場には確かにある。

すなわち、人が死んだ時点で一切の思考（思いやり）をストップさせてしまうのだから、老人介護の理念を、人々が物質レベルでしか見ていないのは明らかなのだ。

バビロン、大いなる驕慢の都バビロン、大いなる物質の塔バベル、それが老人介護の世界に現成している。そして、その都を支配する者こそが大淫婦バビロンなのだ。

彼女は唯物的価値観によって「死後の無価値」を決めつけ、その反動として「生きていることの絶対善」を確定する。

そうして「だから死んだら可哀そう」という優しさを見せる。そのように「霊たる神」からすれば、どう考えても誤っているとしか思えない「優しさ」を見せるのである。

しかしながら、その誤った優しさを、淫らな媚態を、彼女と同様に唯物的文明のなかに生きる国民たちは、何の迷いもなく共有して尊重する。

あまつさえ、彼女が生みだす甘い汁に与ろうとして、多くの「不当な利益を求める者たち」が、その汚れた褥に群がって来ることになる。彼らこそは大淫婦バビロンの眷属だと言えるだろう。

そして、これこそが黙示録における、

「そこは悪霊どもの住みか、あらゆる汚れた霊の巣窟、あらゆる汚れた獣の巣窟となった。すべての国の民は、怒りを招く彼女のみだらな行いのぶどう酒を飲み、地上の王たちは、彼女とみだらなことをし、地上の商人たちは、彼女の豪勢なぜいたくによって富を築いたからである」

という表記が言いあらわす状況である。

製薬会社の収益

大淫婦バビロンの眷属――その現実的な一例を挙げると、まず製薬会社がこれに当たるだろう。

現代における製薬会社の収益は相当なものである。当然のことながら、それは彼らがつくる薬を必要とする者たちが、数多くいるからだ。

そして、その中でも、際立って多くの服薬シェアを占めるのが老人たちである。

私自身、介護士として、老人である利用者に、毎日投薬を行っている。しかし、その薬の量のまた何と多いことだろう。なにしろ一度に飲ませる錠剤が、十五錠を超える場合すらあるのだ。

逆に、一日のうちに一錠の薬も飲まないという老人は、滅多にいない。

そして、この薬代を払っているのは、ほとんど「国」である。医療費に関する、老人の自己負担割合は、せいぜい一割から三割。あとは保険が効くので、自分では払う必要がないのだ。

むろん、この保険（健康保険）の財源になっているのは、国民の税金である。つまり老人たちは、国民の税金から、その多くの金銭を吸い取っていることになる。これは現役世代と国にとっては実に大きな負担だ。

事実、政府の財源不足の大きな要因となっている「医療費の問題」は、国会でも大きく取り上げられている。

マイナスの補填しか意味しない医療

私たちの血税の多くが、製薬会社の懐へと流れていく。そうした事実がある。まさに「老人たちへの優しさ」が生んだ金の流れだと言っていいだろう。

私自身、テレビの映像で、製薬会社の社員が、自分の会社がいかに儲かっているかをアピールしている映像を見たことがある。

しかしながら、本来薬とは、健康な人間には必要のないものである。

すなわち「薬が必要とされない状態」こそが、人間社会の本来あるべき「理想的な姿」なのである。となれば「医療費が縮小すればするほど、人間社会は健全である」と言うことも出来るのだ。

もちろん製薬を含む「医療」が無くなることはない。人間にとって病気や怪我は、滅多に逃れられない、いわば宿命的なものだからだ。

しかし、医療の本来の仕事は、あくまでも「回復」のはずである。回復のあとには健康が続くのであり、この健康（＋再活動）が医療を肯定するものになるのだ。

それに対して、回復の見込みのない命に対する「延命」は、そのあとに健康を接続させることがない。延命に対する医療行為は、せいぜい継続的な「マイナス状態への補填」でしかない。

しかも、そのマイナスの補填もまた、実に大きな問題を孕んでいる。その期間が長引けば長引くほど、国民への金銭的負担は、ことさらに深刻なものとなるからだ。

つまりその場合「製薬会社と医療機関ばかりが収益を上げ、そのことが若者たちや国家を逼迫させる」という図式が延々と続くことになるのである。これでは、

「地上の商人たちは、彼女（大淫婦バビロン）の豪勢なぜいたくによって富を築いたからである」

という黙示録の記述に、あまりにもピッタリと、内容が合致してしまうではないか。

生保受給者の利用者化

さて、大淫婦バビロンの眷属として、つぎに挙げたいのは「生活保護受給者の利用者化」という、介護業界の手口である。

まずは思い出ばなしをしたい。それは私が施設において、実際に介護することになった、ある男性についての話である。

彼はかつて路上生活者だった。

彼は施設に入った時点においても「とうの昔から」自己収入が見込めない人間だった。それこそ彼は、かなり長い期間を、労働の義務も、納税の義務も果たさずに生活してきたのである。自分には、家族も親族もいなかったと彼は言っていた。

しかし、そういう境遇にあったからこそ、彼は生活保護を受給するのが容易だった。

ありていに言うと、足が動かなくなってしまった彼は、国からの保護を受けなければ、自分の生命を持続させることが出来なくなってしまったのだ。なにしろ日本国民には、生存権という権利がある。

結果、彼には、国から拠出される金（生活保護費）が安定的に流れてくることになった。つまり彼の介護費用は、彼個人でなく、国が払うことになったのである。

この時点で、彼は施設側にとっては「確実に料金を徴収できる客」となった。

こういう点においては、国というものは「相当に信用ができる商売相手」だからだ。国が介護料未払でトンズラという話は、まず短期的にはありえない。

たとえば、国民が惜しまず国債を買うのも、それを国が、ちゃんと利子付きで返してくれると、心底から信用しているからだろう。

結果、生活保護受給者である彼は、まさに上客として恭しく施設に迎えられた。

そうして、その晩年を平穏に暮らすことになった。ほとんど社会貢献をしてこなかった彼が、税金を喰いつぶす形でもって。やんわりとした老人介護の優しさに包まれながら。

天の警告

それはきっと、人道的な情景なのだろう。優しい社会の麗しき情景なのだろう。

しかし金銭的に彼を支えているのは、まるで彼と関わりのない、現役世代あるいは若者たちである。彼らから徴収された税金である。

ここには「何かおかしいもの」「何か矛盾したもの」が間違いなくある。かのヤングケアラーのことを思い出せば、私などは悔しい気持ちにすらなる。

だいたい、生活保護のシステム自体が、マルクス教から、強い影響を受けて生まれた福祉政策なのである。その福祉政策から出てきた金銭が、これまたマルクス教的なイデーによって営まれる介護施設を潤すことになる、と。

こうなると私には、両者による「大淫婦バビロン的癒着」もここに極まれり、という感じがしてきてしまう。

それもそうで、事実「まず損をすることのない確実な収益」を求めて、介護業界に参入する事業者も

多いのである。

介護保険料や生活保護という、まさに盤石で堅固な収入――それは企業の経理を安定させるのに、かなり魅力的なものなのかもしれない。

他方、ひたすら損をするのは、高額な納税を課せられる若者たちである。彼らは金と自由を搾り取られて、夢と未来とをゴッソリ奪われかねない立場にある。

このような状況は、公平を求める神からすれば、まさしく「不義」に値するものであろう。だからこそ天は、黙示録のなかで、次のような警告を発するのである。

「わたしの民よ、彼女から離れ去れ。その罪に加わったり、その災いに巻き込まれたりしないようにせよ。彼女の罪は積み重なって天まで続き、神はその不義を覚えておられるからである」

第14章　大淫婦バビロンの倒壊

裁かれるバビロン

社会的矛盾を指摘する予言（黙示録第十七・十八章）として、天から警告は発せられていた。しかし、その警告は人々の耳には届かず、バビロンの都はますます盛況に沸くばかりだった。

だからこそ私は、彼女とその眷属を裁かなければならなくなったのである。天はそれを求め、ヨハネはそれを次のように記した。

「彼女がしたとおりに、彼女に仕返しせよ、彼女の仕業に応じ、倍にして返せ。彼女がそそいだ杯に、その倍も注いでやれ。彼女がおごり高ぶって、ぜいたくに暮らしていたのと、同じだけの苦しみと悲しみを、彼女に与えよ」

私が本書で述べきたことは、まさにこの天の要求に応えるものである。

しかし大淫婦バビロンは、私が何を言おうと、それを不当な侮辱であるとしか考えないだろう。

そもそも彼女は、自分がそのような罪の女であるとは、かけらほども感じてはいないのだから。なにせ彼女は、心の中でこう言っているのだからである。

「わたしは、女王の座に着いており、やもめなどではない。決して悲しい目に遭いはしない」

彼女は自分の優しさに酔っている。よって、それが悪魔的なもの（＝マルクス教的なもの）であるとは、決して考えつかないのである。しかし、だからこそ彼女への「神の裁き」は、よけいにヒートアップすることになる。

「それゆえ、一日のうちに、さまざまの災いが、死と悲しみと飢えとが彼女を襲う。また、彼女は日で焼かれる。彼女を裁く神は、力ある主だからである。」

大淫婦バビロン、倒れる

すでに語ってあるように、私は宇宙的事象とシンクロしている「コズミック・マン」である。日本語で言えば「宇宙的人間」であり、錬金術的に言えば「大宇宙の息子」ということになる。

それゆえ私の――自我には大した力はないが――深層心理が語ったことは、現象界に共時的、共鳴的な現象をもたらすことになる。

そしてそれが、何らかの形で、大淫婦バビロンを裁くことになるのだろう。私にはそのように考えられる。

というより、この文書自体が、即、彼女の命を奪うことになるのかもしれないのだ。いずれにしても、早晩彼女は倒れることになる。

そのときの情景を、ヨハネは次のように伝える。

「彼女とみだらなことをし、ぜいたくに暮らした地上の王たちは、彼女が焼かれる煙を見て、そのために泣き悲しみ、彼女の苦しみを見て恐れ、遠くに立ってこう言う。

『不幸だ、不幸だ、大いなる都、強大な都、お前はひとときの間に裁かれた』」

このとき天の声が勝鬨を上げる。

「その後、わたし〔ヨハネ〕は、大群衆の大声のようなものが、天でこう言うのを聞いた。

『ハレルヤ。救いと栄光と力とは、わたしたちの神のもの。その裁きは真実で正しいからである。みだらな行いで地上を堕落させたあの大淫婦を裁き、ご自分の僕たちの流した血の復讐を、彼女になさったからである』」

かくして大淫婦バビロンは倒壊することになる。

意識化のいきさつ

ときに、私の介護士としてのキャリアは十五年ほどになる。しかしながら、正直に言って「大淫婦バビロン」のことなどは、つい最近までチラリとも考えたことがなかった。

それが本書のような文書の結実に至ったのは、去年（二〇二三年）の春先に何となく見た動画がきっかけだった。

すなわち『ヨハネの黙示録』の内容を追っていたその動画に「大淫婦バビロン」のくだりが出てきたのである。そのときに私は、

「この大淫婦バビロンっていうのは、現実の中では何に当たるものなのだろう」

という問題意識を持った。そして、その問題意識を頭の片隅に残したまま、六月の、会社の全体会議に出席したのだった。

するとそこで、アレゴリーとして述べた「ウサギとトラ」のような論議が生じたのである。

私が「死が悪いものだとは思っていない」と言うと、ある人は、私が無責任であると言った。そして利用者について「もっと生きていてほしかった」と言っていた。

その後私は「何かがおかしい。何かが矛盾している」と思いながら家に帰ったのだが、それから二三日の間に、立て続けに、大淫婦バビロンについての天啓が降りてきた。

「ああ、なるほど。大淫婦バビロンというのは、このことだったのか」

と納得すると同時に、そのときから本書制作のためのアイディア・スケッチが始まったのだった。

運命のもとに

疑う余地がないのは「もし私が介護業界で働いていなかったら、本書は絶対に書かれていなかった」ということである。

そう、きっと私は「大淫婦バビロン」の何たるかを知るために、運命的必然のもと、この介護の世界に入ったのだ。

換言すれば、黙示録の予言を成就させるために、私は実地に、この介護の世界を体験しなければならなかった。この業界の本質を、実体験を通して「髄の髄まで」知悉しなければならなかった。

それが「最後の審判」の裁定者としての義務だったのだろう。

私の知的レベルが——さして頭のよくない——現状のような水準であるのも、結局は、ここにその理由が集約されるのではないだろうか。

個人的には「大きな使命があるのだから、もう少し冴えた頭をもって生まれてきても良かったのではないか」と思っていたのだが。

しかし、そのような知的エリートでは、自ら進んで介護の世界になど、入りはしないだろう。よって、私はさして賢くもない人間として、求職の場面に臨まなければならなかった。

そうして介護士となり、真実を知るのに最も適した立場から、この老人介護という業界に向き合ったのである。

第五部

第15章　定年制度廃止の提言

定年制度の廃止

さて、大淫婦バビロンを根元から倒壊させるためには、現行の介護老人制度に対する代替案、あるいは「介護老人制度を骨抜きにするような妙案」を示さなければならない。

ここからは、それについて思いつくまま、いま私の頭のなかにある素案を書いていくことにしよう。

まず第一の提言として、定年制度を廃止することが挙げられるだろう。

つまり「一定年齢を超えたら会社を辞めなければならない」という就業スタイルを廃止するのだ。そうして社会人の労働期間を「死ぬまで」という形に変更してしまう。そういうことである。

この考えは、実は父神のものである。父神の考えを要約すれば、

「中高年の人間が、退職により、急に体を動かさなくなると、とたんに体調を崩すようになる。そこから病気による『自立度の低下』が起こり、これが要介護の生活に繋がるのである。であれば、そもそも働くことにストップをかけなければよい」

ということになるだろう。

この意見を聞いて、冷たいとか「人間、年を取ったら休んでもいいのではないか」などと思う必要はない。六十近くになり、疲れた顔をして、

「あと一年の我慢だ。そのあとは、年金暮らしになって楽が出来るはずだ」

などと言っている人に限って、必ずと言っていいほど、次のような羽目に陥るからだ。

すなわち、そういう人が実際に定年を迎えると、ひと月も経ずして、今度はこれまでとは逆の「退屈の極み」を味わうことになるのである。

そうして彼は、深いため息をつきながら、

「ああ、何か仕事をしたいものだ。自分の役割がないというのは、あまりにも寂しい。

だが、この年齢では、どこも雇ってはくれないだろう。しかも、ここのところ急に足腰が弱ってきたような気がする」

などと愚痴を漏らすようになるのである。

定年制は社会的暴力

他方、自分では「ずっと働いていたい」と思っている人が、定年制度によって強制的に「退職、体調不良、要介護」の流れに乗せられてしまうこともあるだろう。

この悪しき流れを止めるためには、現状では、当人による積極的な努力に一任し、個人で再就職への

道を拓いて貰うしかないことになっている。見たところ、大方は事実そうなっている。

しかしながら、本来は社会の側が、もっと根本的に割り切って、

「人間は働くために生きているのだ。ならば死ぬまで働いてこそ本望なのだ」

と考えを改めてしまったほうが、よほど健全であろう。そうして、そのための社会制度を整備することこそが政治的本道なのである。

だいたい、六十歳とか七十歳という年齢をして、これを一律に「退職のライン」へ嵌め込むこと自体がおかしい。私には浅慮な恣意としか思えないし、ともすれば、ほとんど暴力的な制度とすら感じてしまう。

だって人間、各人によって、体力年齢も、頭脳年齢も、精神年齢も異なっているではないか。その差異は、ときには、十歳とか二十歳ぶんの開きになることすらあるだろう。

もし定年制度を残したいのであれば、その場合は、この実質的な年齢に即して「定年のライン」を決めるべきなのだ。そのためには、実質年齢を測る、何らかのテストのようなものを用意しなければならないだろうが。

だから最もシンプルなのは、やはり定年制度そのものを廃して「誰もが死ぬまで堂々と働ける環境」を整備することなのである。

定年制度の価値

よくよく考えてみよう。私たちは定年制度を「国民の祖法」ぐらいに思って遵守しているが、これは果たして、そこまで尊重するほどの制度なのだろうか。

がんらい定年制は、企業側のシステムとして始まって、それが後に社会全体の慣習となったものらしい。明治時代の後期にそれが始まり、当時は五五歳が定年とされていた。

そうしたなか、六十歳の定年制度には、はっきりとした生起譚が残っている。田中館愛橘（一八五六～一九五二）という人の言行がその契機となっているのだ。

この田中館という人は、日本物理学の父とも言われる大学者である。そうした彼の、定年制にまつわるエピソードを紹介しよう。

一九一六年十月、六〇歳を迎えた田中館は、還暦祝いの席で、突如、東大教授の辞職を申し出た。

当時はまだ定年退職の制度はなかったので、この発言に大学当局は驚いたというが、

「こんな老いぼれ一人の代わりに、新進の立派な人が二人増えたらけっこう」という意思が認められて、翌十七年、田中館は正式に依頼退職した。

これが、六十歳定年退職制度ができるきっかけとなったと言われている。

夢プロジェクト編『世界を変えた天才科学者五〇人』より（改行を増やした）

こういう美談によって、定年制が社会制度として補強されていったのだろう。

ところがだ。この田中館愛橘は、実際には、百歳近くになるまで、元気に活動を続けていた人なのである。そんな人間が六十歳という年齢を「老いぼれの歳」などと規定するのだ。これは笑止千万であろう。

かくも定年制の根っこにいる人にして、この調子なのだ。だから我々は、むしろ胸を張って、

「六十歳なんてまだまだ若い。定年制なんてナンセンスだ」

と言っていいのである。

辞めるかわりに休むこと

もっとも、私は決して「死ぬまで休んではならない」などと言っているわけではない。

そうではなく、近い将来の「ふたたび働きだす日」につながらない「無際限の休み」ばかりは排除しようと言っているのである。私は「無際限の休み」については純粋に「それは心身ともに悪影響を与えるものになるだろう」と考えるものである。

実際のところ、大方の人間は、一カ月も休んだならば、再び自然に「また働きたいものだ」と思う生き物なのだ。

休息は基本退屈なものだし、その退屈を仕事以外のことで埋めるには、結構な金がかかる。そして国民の大半は、そこまでの金持ちではなかろう。

金もない状態で一カ月以上休もうと思ったら、その時には、病気にでもかかるしかないだろう。ここに世にいう「病は気から」の症例が生まれてくる土壌がある。

よって、休むのは結構だが、ぜひとも「仕事を辞めること」は止めておこうではないか。それが介護老人制度を骨抜きにするための第一歩となるだろう。

第16章　死後の生命の認知

死にたくないから生きる、の否定

介護老人制度を骨抜きにするものとして、第二に掲げたいのは、要介護老人の念頭から「死にたくないから生きる」という思考パターンを無くす、ということが挙げられる。

一般的に言って、退職した老人たちの大半は、特別に「生きて何かを成し遂げたい」と思って生きている訳ではない。そうではなく、彼らは単に「死ぬのが怖いから生きていたい」と願っているだけなのである。

それはなぜか。それは彼らが「死んだら無になってしまう」と思っているからである。あるいは、死後に自分がどうなってしまうか分からないので、それが不安で仕方がないのである。

だから生きていたい。少しでも長く生きていたい。

けれども、これでは真に「生きている」とは言えないのではないだろうか。

それは生きているというよりは、むしろ「生の残滓にしがみついている」と形容したほうが良さそうな状態であろう。

ところが、実際に——介護士として——老人たちの姿を間近で見ていると、このような「死ぬのは嫌だから生きていたい」という強い思いが、意外なまでに彼らの「延命」に寄与していることが分かってくる。

これはまさに「一念岩をも通す」の一例である。

ことに重篤な認知症老人の場合は、たとえ自分が骨折していても立ち上がり、しかも時にはそのまま歩いてしまうような「奇跡」も起こせてしまう。

つまり、そこでは精神が肉体を超えていくわけである。

そして認知症の重症度は、その思い込みの強さと比例関係にある。だから、こうした老人が一心に「死にたくない」と強く願えば、いきおいその願望が、実際の延命にも寄与してしまうのである。

これを生への執着と言ってもいいが、もっと正確に言い表せば、これはもう「生への妄執」であろう。

どちらにせよ、老人たちの「死の恐怖から逃れたい」という願望は、たしかに彼らの「肉体を維持するエネルギー」として利用されているのである。

死後にも継続される生命

しかし、こうした老人たちであっても「自分の生命が死後も継続する」と確知できたならば、そこに、ある種の「潔さ」を持てるようになるのではないだろうか。

それは死への恐怖を克服した、心の爽やかさであると言ってもいいだろう。

そして事実、私たちの生命は死後も継続し、しかも一定の霊界生活（天国か地獄）を経たあとには、現世への生まれ変わりさえ経験することになる。

こんなことは、マルクス教が盛んになるまでは、少なくともアジア圏では、人々の常識だった。そこでは仏教やヒンズー教の転生輪廻の考え方が、隅々まで浸透していたからだ。

その常識のなかで、人々は自分の死を粛々と受容していた。

そのとき老人たちは、いわゆる「お迎え」を待っていた。老いて苦痛ばかりになった現世よりも、むしろ死後の天国や、極楽浄土における安穏な生活を望んだ。

そのような死の間際にあって、彼らが、死後の何を恐れることがあっただろう。何も恐れることはない。それだから彼らには真の潔さがあった。

このように平静な「死の受容」は、マルクス教の「生の絶対肯定」よりも、はるかに私たちにとって有益なものとなるはずである。

そこには安らぎが、しかも「延命を拒むほどの」安らぎがある。

逆に、生の絶対肯定は、死の無意味化、死後世界の無知化、そして何より「死への恐怖と忌避感」を生む。そして、その恐怖と忌避が、老人たちから潔さを喪失させる。

だから、宗教を馬鹿にしてマルクス教を尊重することは、百円玉を捨てて十円玉を拾うような愚行にも等しいのである。私たちはそろそろ、この事に気づいてもいい頃なのではないだろうか。

宗教的レクリエーションの導入

認知症になってからも「効く」のかもしれないが、確実な効能を求めるならば、認知症になる前の利用者にこそ、私たちは、宗教的知識を与えるべきである。

といっても、彼らに難しいことを言う必要はない。

老人たちはもう自己形成に取り組むべき年齢にはないのだから、自力門的な難行や、込み入った教学を彼らに説く必要性はない。西洋的に言えばヘルプセルフ（自助努力）の教えを説く必要はない。

むしろここでは、浄土門の他力本願をベースとしたテキスト、なおかつ箇条書きのようにシンプルな宗教的テキストが好ましい。そうした内容が盛られたテキストを、介護施設などに配布する、と。

そして、そのテキストに則り、

「死後にも生命は継続する」「そこは安らぎの世界である」「あなたを神仏が救ってくださる」「やがてあなたは生まれ変わる」

という単純な教えを職員に説いてもらう。

より適切に表現するなら、それをレクリエーションとして、介護職員にプレゼンテーションしてもらうのだ。

このレクリエーションは、現状をわずかに充実させる「暇つぶしのレクリエーション」などでは決してない。それとは反対に、老人たちの未来を拓く、真に意義のあるレクリエーションとなるだろう。

ちなみに私はレクリエーション介護士の資格（二級）を取っており、ただ無責任にこのようなことを言っていると思ってほしくない。これは飽くまでも、レクリエーション介護士としての言葉である。

そうしてみると、すでに死後への不安を抱えている現状があるのだから、多くの老人にとって、この宗教的レクリエーションは、それなりに受容しやすいものとなるはずだ。

少なくとも、受容したがる利用者は、一施設につき、必ず何人かは存在するだろう。

それによって老人たちの心に、死に対する潔さが生まれたならば、彼らの「一念岩をも通す」的な延命効果も、ある程度は脆弱化することだろう。

しかも、そこには副産物的な効能も現れてくる。それを次に見てみよう。

タナトス防壁の無力化

認知症の老人が対象であっても、宗教的レクリエーションの効能は、ある程度までは現れるだろう。も

ちろん、非認知症の老人の場合と比べれば、その規模は、比較的小さなものに限られるだろうけれども。

ここでは、認知症老人が「ある程度」であっても、その宗教的知識に理解を持ち、その産物である「潔さ」を獲得したとしよう。

そうすると、かのタナトス（死への欲求）は、それまでよりも、ずっと容易に老人に働きかけられるようになる。

というのは、それまでは老人たちの生の妄執が、タナトスに対して、一種の防御壁の役割を果たしてしまっていたからだ。

その防御壁が無くなることで、あるいは薄くなることで、タナトスは自然と、老人たちの心に忍び込みやすくなる。

そして既に読者も了解しているように、タナトスとは、老人にとっては「無意識的な死への欲求」のことである。したがって、形はどうあれ、タナトスが働きかけるとき、老人たちはスッと死へと飲み込まれていく。

宗教的レクリエーションによって、表面意識までもが「ある程度」死への抵抗感を失っているならばだ。そのときタナトスは、もしかしたら、食事拒否や徘徊によらずとも、認知症老人を、死の世界へと引き入れることが出来るかもしれない。

この場合、老人たちは顕著な苦痛を受けることなく、すっと意識が消えるような形でもって死んでいくことだろう。

そして、早期かつ大規模な効果は期待できなくとも、やがてこれが、要介護老人の数を減じる結果を生じめることは間違いないだろう。

言い換えれば、介護老人制度を、少しぐらいは骨抜きにすることが出来るだろう、ということである。

第17章　タナトスの社会的受容

倒錯した優しさから逃れる

早期かつ大規模な効果を求めるのであればだ。介護老人制度の代替案として最も有効であるのは、タナトスの社会的な受容だろう。

ではタナトスを受容するとは、どういうことか。まず理念的なところから始めよう。

そうしてみると、まず私たちが意識しなければならないのは、認知症老人を延命させることが、自然の摂理から外れた「余計な優しさ」であるということだ。

実際それは、人間が摂食するときに「食べられる動植物が可哀そう」と思う優しさと同じぐらい、偽善的で無意味なものである。

なぜというに、それが真なる善であり、真に意味のある優しさであるとすれば、「ならば絶食して飢え死にするのが、我々人類にとって正しいことになるのか」という無益な議論がそこから始まってしまうからだ。そんな訳あるはずもないのに。

食べることでしか――生き物の命を奪うことでしか――生きられないのが、私たち人間であり、一般的な動物である。私たちは宿命的に、そうした「残酷な存在」なのである。

では、そんな残酷な私たちにとって、真に「生命を尊重する」ということは、一体どういう行いになるのだろう。

偽善者にならないために

それは唯一、食べられた生命の分まで、私たちが、自分の生命を有益に使うことではないだろうか。それだけが「本当の優しさ」なのではないだろうか。

そう、決して「食べずに動物の命を守る」ことが、「そのために自分が飢え死にする」ことが優しさなのではない。それは単に「優しさに見える」だけのことである。私たちの本性に照らしてみれば、それは単なる自己満足の偽善でしかない。

それと同じように、死すべき時にある老人たちを、無理に延命させることが、本当の優しさになる訳ではないのだ。

むしろそれは、結果的に若者たちから生気を奪い、人間社会を低迷させる迷惑行為となるだろう。しかも同時に、それは「霊的世界を含めた社会秩序」を破壊する行為ともなるだろう。

私たちは自然摂理の破壊者になってはならないし、また偽善者にもなってはならない。

あのアレゴリーに沿って言えば、寂しさが溢れても、見ていて苦しくなっても、トラがウサギを食べていれば、私たちは「黙ってその情景を受け入れる」という節度を持たなければならない。

つまり老人が進んで死を望んでいるならば、それを黙って尊重しなければならないのだ。それこそが自然の摂理に即した「タナトスの受容」ということである。

具体的なタナトスの受容

では、ここからは具体的で現象的な「タナトスの受容」について見ていくことにしよう。

となると、まず最初に挙げるべきは、食事介助の場面におけるタナトスの受容である。

認知症老人が自らの意志では食事を摂らなくなると、現行では、その時点で介護職員が食事介助を始める。たいていはスプーンを持って、食べ物を利用者の口に運んでいくことになる。食事介助を必要とする利用者が五人もいれば、そのときにかかる時間は、一時間ほどになるだろう。

タナトスを受容するならば、これは実践すべきではない行為となる。

そもそも食事介助をしても、その半分ぐらいのケースで誤嚥が起きてしまう。誤嚥というのは、要す

るに食道ではなく、気道のほうに食べ物が入ってしまうことだ。気道の先には肺があり、そこに異物が入ることで、いわゆる誤嚥性肺炎が起きてしまう。

肺炎は「日本人の死亡原因」として五位あたりに入る病気であるが、老人の場合、その肺炎の七割以上が、この誤嚥性肺炎だと言われている。

何しろ食べる意思がない人間に、その意に反して、ものを食べさせるのだ。よって誤嚥ぐらい、いつ起きても不思議ではない。私も実際に、幾度となく誤嚥性肺炎の発症現場や報告に出くわしている。

ということは、とどのつまり「食事介助という延命行為ほど、報われないものはない」ということだ。

点滴、経管栄養法の否定

また、食事介助以外にも、点滴や経管栄養法による延命措置があるだろう。経管栄養法とは、かいつまんで言えば、腸に直接、栄養剤を流し入れる形での摂食方法である。

だがタナトスを受容するのであれば、これらの介助もすべきではない。

というのも、点滴や経管栄養法に頼っているということは、多くの場合において、その老人が、植物状態か準植物状態にあるということだからだ。

しかもそこに認知症を併発していることが多い。そうなると、もはや彼は、生きているというよりは「死んでいないだけの状態」に近いことになる。

その状態を維持するのだから、これこそは純粋な「延命」と言えるだろう。

最もひどい場合では、彼らの子供が「年金取得を継続させるために」そのような「認知・植物状態」での延命をさせることもある。戦死した方の配偶者などには、かなり高額の年金（遺族年金）が支給されるので、そういうケースが生じるのだ。

「だから、ただ生かしておいてくれればいい」と、そう本気で言ってくる家族がある。本当に、死んでさえいなければいい、と。

こういうケースを見ると、私など、その老人が生きていること自体が気の毒になってしまう。実際、自由に死なせても貰えないなんて、なんと哀れなことだろう。

自己の死を求めている状態

次に挙げるべきは、認知症がもたらす徘徊への意欲と、そこから派生する、転落事故や転倒事故、さらに交通事故に関してである。

こうした状態もまた、今の私たちならば「タナトスが自己の死を求めている状態」として認識することが出来るだろう。

しかし現行の介護現場にあっては、右のような事故は、そのほとんどが介護職員の不注意による顛末として扱われている。つまり介護職員の不注意が、老人たちを過失傷害、過失致死させているというこ

とだ。

しかし、そのような責任の押しつけは、決して公平なものではない。なにしろタナトスの巧妙さは、介護士たちの意識の隙を狙うようにして、まさに不可避的なレベルでもって、老人たちの死を誘発するからだ。換言すれば、老人たちは「わざわざ介護士たちに見つからないようにして」その体を破滅に向かって発動させるのである。

なぜ認知症の老人にそんなことができるのか。あなたはそう問うだろうか。

それは、このとき状況を視認しているのが、認知症老人の目ではなく、彼の守護霊の目だからである。霊の視野は、生きている人間の視野よりも余程広く、また視力も高い。ときには壁の向こう側まで見えてしまう。そして、タナトスによって老人を動かしているのは、まさしく、この霊的な「優れた視力」なのである。

このような守護霊の視力にかかれば、介護士たちの隙を見つけることなど朝飯前である。よって、これを介護士の責任にすることは、むしろ介護士たちに、不当な責任を押し付けていることになるだろう。

死に伴う苦痛

とはいえ、事故によって傷ついている老人たちを、その命が尽きるまで傍観しているということは難しい。あまつさえ、その「尽きるまで」が長期に渡ったとしたら、かかる傍観は、極めて残忍な無為になるだろう。

私は、死そのものに対する悲劇性は感じていない。恐怖感もない。本当に一片の恐怖心も持っていない。それは魂が自己の居場所を移すだけのことだからだ。

けれども「死に伴う痛み」に対しては、私は、大きな悲劇性と恐怖を感じる。

実際「どうして、こうも苦しんでからでないと、彼は死なせてもらえないのか」と人に思わせるような死に方が数多くある。また誰もが「こういう死にかたはしたくないな」と願うような死に方もある。

そのため、自然とここに「安楽死」という言葉が浮かんでくることになる。よって次の章では、この安楽死について掘り下げていってみよう。

第六部

第18章　安楽死についての考察

必然ではない苦しみ

認知症老人がタナトスに促されて徘徊しようとし、そこから転落、転倒事故、交通事故が誘発されたとしよう。

このとき「それで老人たちの命が永らえた」とすれば、私たちはこの時点をもって「安楽死」を検討するべきである。それというのも、生き残った老人たちは、そのとき怪我による強烈な苦痛に悶えていることが多いからである。

ここはとても重要なところだが、そのとき生き残った老人たちは「幸いにも助かった」のではないのだ。タナトス的な立場から見れば、それとは逆に、老人たちは「不幸にも死に損なった」のである。

つまり彼らの守護霊たちは、この延命状態を何としても口惜しいと思っているのである。

ならば私たちは、怪我をして苦しんでいる状態で「なおも生きている」老人たちを助けなければならない。確実な死を与えることによって助けなければならない。

つまりは彼らを「殺すことで助ける」のである。

もちろん、このような言葉が読者を不快にさせ、あるいは悩ませることになるのは、私も重々分かっている。

場合によっては、オウム真理教の「タントラ・ヴァジラヤーナ」を思い出す方もあるだろう。ただしこれは「健康な人でも教団のためなら殺してよい」という内容の、まさしく「殺人教義」であったが。

それはさておき、先の認知症老人の状況――不幸にも死に損なった状況――は「切腹をしたあと介錯を待っている武士の有りさま」に酷似してはいまいか。

つまり「もう死ぬほかないのに、そこに苦しみだけが残っている状態」にである。

そのような状態にあるとき、大方の武士は叫ぶ。「早く介錯を！」と。要するに彼らは「刀で俺の首を切ってくれ。少しでも早く自分を殺してくれ」と言っているわけだ。

間違っても、そのとき彼らは「どうにか生きながらえさせてくれ」とは言わない。死そのものは、とうに受け入れているからだ。彼らが逃れたいと思っているのは、飽くまでも「死に伴う苦しみの継続」のほうなのだ。

苦痛を恐れる気持ち

確認しておくが、私はタナトスによって生じた死は、自他（利用者本人と介護者）ともに謹んで受容すべきと考えている。

だが、その死が苦痛を伴うものであることには、私は、大のつく心理的抵抗を感じざるを得ない。端的に言えば、自分のことでも他人のことでも「あんまり痛いのには耐えられない」のである。

むろん死は、私たちが生まれ時点で確約された、最終的な必然状態である。

けれども私は、その死に際しての大きな苦痛のほうには、別段そのような必然性は伴っていないと考えている。つまり死に際の激痛は、自然の摂理が「どうしても求めるもの」ではないと思うのである。

それでなくとも、私は人一倍「死にともなう苦痛」を恐れている。衷心から、出来るかぎりそれを避けたいと願っている。これには、もしかしたら、私の過去世の記憶が、何らかの心理的影響を与えているのかもしれない。

事実、転生輪廻の考えからすれば、私たちは幾度となく死を経験している存在である。そして、その数多の死際の中には、きっと苦痛に満ちたものも多かったに違いないのだ。

苦悶に満ちた死

とくに私の場合、キリスト教の歴史を学ぶなかで、イエスの十字架や、異端審問における処刑などの「苦痛に満ちた死」の情景を知りすぎてしまった。もちろんそこに、魔女狩りにおける拷問死なども加わってこよう。

それは具体的にはどんなものか。ではまず、異端審問における拷問死の例をひとつ挙げてみよう。

特に酸鼻を極めるのはネズミを使った拷問だった。被告人のむきだしの腹の上でネズミを山盛りにした大皿をひっくり返し、皿に火をつける。

するとネズミはパニック状態となり、被告人の腹のなかに逃げ込もうと穴を掘るのである。それでもこの苦痛に耐え、自白をしなかった者は、生きたまま火あぶりにされた。

ヘレン・エラーブ著、井沢元彦監修『キリスト教の裏面史』より

次に示すのは、魔女狩りにおける死の例である。

拷問を受けても死ななかった魔女は火あぶりにされた。火刑は公共広場で行うことが多かったので、審問官は魔女の口に木製のくつわをかませたり舌を切ったりして群衆と言葉を交わせないようにした。（前掲書より）

さまざまな残酷死

キリスト教に限らず、歴史を紐解けば、そこには残酷な死にざまが満載だ。

たとえば、マニ教の教祖が生皮をはがされたとか、オスマントルコの兵士が、やはりキリスト教徒の生皮を剥いだとか聞くと、本当に身の毛がよだつ。皮を剥がすと言っても、そこには皮下の肉もたっぷり付随するのだからたまらない。

目を潰される話や舌を切られる話も多い。これも実に凄惨だ。こういう話の数々が、私の「死に伴う苦痛」を恐れる気持ちに拍車をかけてしまっている。

中国にもその手の話は多いが、中でも孔子の弟子である子路が、敵に「食人」されているのは有名だ。かの国には、そうした食人の習慣があったのである。

そういう歴史を知る人間であるからこそ、私はなるべく苦痛のない死を夢見てしまう。「頼むから一思いに殺してくれ！」と思ってしまう。それと同じぐらい他人にも、なるべく苦痛を伴わない死を提供してあげたいと願ってしまう。

死の形式と苦痛の大きさ

では具体的に、どのような死に方であれば、当人の苦痛が少なくて済むのだろうか。

それを考察するにあたっては、各国の死刑の形式を眺めることが参考になるだろう。死刑もまた、安楽死と同様に「他人から与えられる死」に他ならないからだ。

そうすると、もっとも身近なのは、日本における死刑、つまり絞首刑ということになる。

だが私は、この殺され方だけは、絶対に遠慮したいと思っている。首を吊るされてから死ぬまでの何分間か。その数分の苦しみを想像すると背筋がゾワゾワとなってしまう。

それならば、いっそフランス革命の頃に用いられた「ギロチン」のほうが、よほど私には好ましい。見た目は怪異だが、死刑囚はちゃんと目隠しをしてもらえる。

第一ギロチンは「最も人道的な処刑法である」と評価されたこともあるのだ。死ぬまでの時間が一瞬だからである。

この点、切腹における介錯も同じだ。この首切り作業もまた、ギロチンと同じく、一瞬でことが終わりそうである。事実、鮮やかな一太刀で切ってもらえれば、被験者は、ギロチンと変わらないぐらいの「一瞬の死」を得られるだろう。

ところが、ここに何とも残念な盲点がある。すなわち名刀ならざる普通の日本刀では、そう簡単には、首の太い骨は切れないのだ。なにぶん、誰もが、正宗や三日月宗近のような名刀を使わせてもらえた訳ではない。

そのため介錯者は、首が切断されるまで、何度も何度も刀を振り下ろすことになる。そこを考慮に入れると、切腹のくだりを含めて、あまり出くわしたくない死に方になってくる。

苦痛のない安楽死

アメリカなどはどうだろう。アメリカは多くの州から成っている「合衆国」なので、州ごとに死刑の方法は違っている。そこには銃殺もあれば絞首刑もある。

そんな中で代表的な死刑方法になっているのが「薬剤投与」である。ありていに言えば、毒を飲ませて死刑囚を死なせるのである。

詳しくは分からないが、その場合、受刑者に、あまり苦痛を与えないような薬品を使っているはずだ。おそらく死刑囚たちは、それを飲んで「眠るように死んでいく」のだろう。

苦しみを与えない薬品と言えば、まず思い浮かぶのがアヘンである。

私は、このアヘン無痛になっている囚人を切り刻んでいる、中国の処刑風景を見たことがある。もちろん写真で見ただけだが、それでも十分に強烈なインパクトを持っていた。なにせ、足をもぎられ、胴体に穴を空けられても、囚人の男は笑っているのである。

アヘンの麻酔効果がそうさせているのであろうし、おそらく彼は、その無痛のままに死んでいったのだろう。

せっかくだから読者にも見てもらうことにしよう。写真は、ジョルジュ・バタイユ著、森本和夫訳『エロスの涙』から転載したものである（ちくま学芸文庫）。

2024-01-09（1）.png

確かに、写真越しに見える「処刑する側に回った人々」の狂気には目に余るものがある。しかし、それをよそに、死んでいく囚人の顔は穏やかなものだ。彼は死ぬまで何らの苦痛も感じなかった。それだけは間違いがなさそうだ。

だから私は、自分が死ぬときには、この方法で行きたいと考えている。べつにアヘンでなくともいいが、無痛の毒薬で殺してもらえるなら、それに越したことはない。そのように思っているのである。

現代には医療用モルヒネという、たいへん結構な合法的麻酔薬も存在している。

死んでいることを分からせるために

ただし、そのように苦痛がない状態で死んでしまうと、このとき一つだけ深刻な問題が出てきてしまう。それは死んだ者が、自分の死を明確に自覚できないことだ。

そのとき彼は「生と死の境目」を認識できなくなる。薬品による無痛が、あまりにもスムーズに、二つの世界（生の世界と死の世界）の境界線を通り越させてしまうからだ。

だから彼は、ほとんど自覚のないままに霊となってしまう。下手をすると、彼は、まだ自分が生者であるかのような錯覚にさえ、陥ってしまうかもしれない。

そして彼は、その錯覚のなかで「自分は生きているのに、人に話しかけても無視されてしまう」「自分は生きているのに、人に頼みを聞いてもらえない」といった、まことに辛い目に遭うことになる。

もちろん、それは実際には、彼が生者には見えない「霊」であるからこそ惹起される、そうなって当然の事態ではある。

だが彼は、自己認識としては、飽くまで自分を「生きている人間」と思っているのだ。ために、ここに矛盾的な軋みが生じてくる。つまり彼は、そこに不要な「他者からの悪意」を汲み取ってしまうのである。

そのような悪意を感じた霊は、安易に復讐に走ることになる。復讐の相手は、彼の言葉や存在を無視した生者だ。そうして、それが霊障、つまり「霊による生者への嫌がらせ」となってゆくのである。

こうした問題を避けるためには、薬品による安楽死を迎える前に、その対象者へしっかりと「これから君は死ぬことになる」「これから君は霊界へと旅立つのだ」ということを教える必要がある。そしてさらには、

「霊となった君は、生きている者には認識されない」「君が心を開けば、君の守護霊が現れ、その後の経緯を導くだろう」

といった、もう一歩踏み込んだ知識をも、教えておく必要があるだろう。

つまりは「介護老人施設を経由した安楽死」を想定するのであれば、すでに一度触れた「死後の知識を教えるようなレクリエーション」を常設的に施行することが重要になるだろう。

第19章　安楽死の事前申請

認知症患者には出来ないこと

タナトスに促されて事故を起こし、その結果として苦痛状態にある老人。そんな老人に安楽死を与えることは、切腹した者に介錯を与えるような「優しさ」であると論じた。

しかし、それは次善の策であって、最善の対応策ではない。

それは何故かといえば、認知症に罹っている老人相手では、前章の最後で語ったような「死の自覚と、死後の知識を与えるための事前レクリエーション」が、あまりまともには機能しないからだ。

つまり認知症老人に、

「安楽死のあと、あなたは死後の世界に霊として存在することになるのですよ」

と言ったところで、彼がそれを理解し記憶するのは、ほぼ無理だということである。

だからそこには、どうしても賭けの要素が発生してしまう。

すなわち賭けに負け、安楽死を与えられた認知症老人が、その死後、生者に悪さをする「悪霊」になるという可能性――そうした不都合が、ここには常に付いて回ることになるのである。

このような困難を解決するためには、安楽死を与える側の祈りが、大きく効を奏することだろう。すなわち、死者となった老人に対して、

「○○さん、あなたは既に死んでいるのです。あなたは今、霊となっているのです。それをまず自覚してください」

「そのうえで、生者に関心を持つよりも、自身の霊的な生活に目を向けてください」

「私たちには、あなたの声を聞くことも、姿を見ることもできません。そのことをお許しください」

といったメッセージを送るのである。それが「安楽死を与える側の祈り」となる。

死者は、そのようなメッセージを聞き取る能力を、確かに持っている。

もちろん霊は、肉体的な耳目は持っていない。けれども、相手の思念を感じ取る力は、生きていた時以上に――というより生きていたときの何倍も増強された状態でもって――発揮できるようになっているのである。

よって生者の祈りが、彼の悪霊化を防ぐための一助となることは間違いないだろう。

事前の安楽死申請

前項を含め、これまでに示してきたのは、あくまでも安楽死に関する「次善の策」である。

それに対して、安楽死に関する最善の策にあたるのは、認知症になる以前に、当人が「安楽死の申請」を行うことである。

別に難しいことを言っているわけではない。要するに、認知症の症状が出てくる前から、

「もし私が認知症になった時には、すみやかに安楽死の手続きに入ってほしい」

という遺言を残しておくということである。

そしてさらに、まだ理解力があるうち、自身で宗教的な知識を学んでおくのだ。これによって自己の「死後の悪霊化」を完全に阻止することが出来る。

そう、私が「認知症になってからの強制的な安楽死」を次善の策とすること。それに対して「認知症に

なる前の自主的な安楽死」を最良の策とすること――その理由は、ここで大きな差が生まれるからなのである。

そしてまた、この私にだって、未来において認知症になる可能性はあるのだ。

だからここに遺言として明記しておきたい、

「もし私が認知症になった時には、すみやかに安楽死させる手続きに入ってほしい」と。

これで私も、やっと一本目の十字架を背負うことが出来た。

とはいえ、この遺言が滞りなく執行されるかどうかは分からない。日本ではまだ、安楽死が法的に認められていないからである。

いま私たちが安楽死を合法的に行うなら、様々な手順を踏み、最後には、スイスかオランダにでも行くしかない。

現状、日本において安楽死は、法律上「同意の上の殺人」ということになっている。つまり安楽死を施した人間が、嘱託（＝同意）殺人罪に問われるということだ。

この罪状によって実刑判決を受ければ、七年以下の懲役に処されることになる。

したがって、法改正がなされないかぎり、安楽死は行えないことになる。今のところ私たちは、この法改正を待つしかないのである。

ただし、自然の摂理は、安楽死を許さない現行法をして、これを「誤り」として認定することだろう。よって私は、一日も早い法律の改正を望むものである。

宗教的な罪としての自殺

また、法律のレベルに委ねる前に、安楽死の執行には、もっと根源的なネックがある。

それは、右のような遺言を残すことや、自ら進んで安楽死を望むことは、一般的には「一種の自殺」として捉えられてしまう、ということだ。

この自殺というものは、多くの宗教から「無条件的な悪」として断罪されている。

そして、宗教的に悪い事を為すことは、その宗教を信じる者にとっては、社会的に悪いことをするよりも、数等強い罪悪感を与えられる事象になる。

よってそれは、法律のレベルよりも「根源的なネック」とならざるを得ない。

そして、これは特にキリスト教において顕著なことだと言えよう。たとえばカトリックの教義は、自殺について次のような規定をしている。

第五のおきて（＝殺してはならない）は道徳法に反する重大なこととして、次のようなことを禁じています。（中略）

直接的な安楽死。これは障害者や病人あるいは瀕死の状態にある人のいのちを作為によってあるいは取るべき処置を取らないことによって死に至らせることです。

自殺と意図的なその幇助。これは神と自分自身、そして隣人への正しい愛に対する重大な侮辱だから

です。

その責任については、つまずき（他人をそそのかして罪を犯させること）を生むことでより重大なものになりえますし、特異な精神的混乱や極度の恐れがある場合には軽減させることもありえます。

カトリック中央協議会『カトリック教会のカテキズム要約』第二部「神の十戒」より

このような教義があるため、キリスト教圏で――安楽死を含めて――自殺者が出ると、残された家族は大変辛い思いをすることになる。

つまり彼ら遺族は、日本で言うところの村八分のような目に遭うのだ。自殺した本人も、当然キリスト教の救いから除外されることになる。

こうなると、キリスト教圏から、安楽死（自殺）を受容する者がいなくなっても不思議はないだろう。

イエスの自殺

しかし私は、この問題に関して、かねがね大きな疑問を抱いていた。

すなわち、たとえキリスト教圏であっても、自殺というものは「それをすれば神に見放されるほどにも悪いこと」として扱うべきものなのだろうか、と。

このようなことを言うのは、私の目には、キリスト教圏における「ある尊き人物」の死が、どうしても「自殺」にしか見えないからである。

その人物とは、他ならぬイエス・キリスト――キリスト教の教祖である、イエス・キリストのことである。改めて言うと、私の目には、このイエス・キリストの死が、どうしても「自殺」に見えてしまうのである。

これについては、ここで読者にも検証してもらおう。

――二千年前のユダヤにおいて、イエスは弟子たちに、

「自分がエルサレム行けば、多くの苦しみを受けて殺されることになる」

という未来予知の内容を告げた。エルサレムはユダヤの首都であり、城塞都市である。

弟子たちはそれを聞いて驚き、また深く悲しんだ。中でもペテロはイエスに対して、

「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」

と興奮して反駁した。だが、それに対してイエスは怒りながら返答する。

「サタン、引き下がれ。あなたは私の邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを考えている」

これほどにも強硬にイエスは反発しているのである。つまりイエスは「死んでも構わない。私は絶対にエルサレムに行くのだ。邪魔をするんじゃない」と言っているのだ。

かくしてイエスは、本当に「自ら進んで」エルサレムに入城した。そして周知のように、そこで予知どおり十字架に架けられて殺されたのだった。

となればイエスは、死に必着する道程に、自ら進んで身を投じたということになる。

ここで読者に問いたい。これは自殺ではないのだろうか、と。

自分を殺すことが自殺であるならば、イエスは人生選択として、確実にそれを行った。彼には確かに「生き残るため、エルサレムに行かないことにする」という選択肢があったのに、それを敢えて採ろうとしなかったのだから。

よって、少なくとも私には、これは明白に「自殺」という行為であるように思えるのである。

第20章　愛の一元論

自殺とは呼ばれない自殺

前章で語ったように、イエスは自ら進んでエルサレムに赴き、そこで覚悟の上の死を迎えた。私には、その在り方が、自殺者のそれにしか見えなかった。

しかしクリスチャンは、このような行為をしたイエスをして、決して「自殺者」とは呼ばない。というより、これを自殺とは「つゆとも思わない」というのが実情なのではあるまいか。たとえそれが明確に、自殺という概念の必要条件を満たしていても、である。

それはなぜか。それはイエス・キリストが「人々への愛を示すために」自ら死んだからである。

こうした場合、それが一見して自殺に見えたとしても、人々はこれを「自己犠牲」と呼び替えようとするのだ。

そして、この自己犠牲なるものは、愛の心が、現実のなかに、その一形態をもったものだと考えられている。

イエス自身『ヨハネによる福音書』のなかで、

「友のために死ぬこと。これよりも優れた愛の行為はない」と言っている。

しかも『ヨハネの手紙、第一』には「神は愛だからです」という文言により、愛と神を＝で結ぶ思想までもが語られているのである。

この「神＝愛」から生まれた――神によって生み出された、愛によって生まれた――自己犠牲であるがゆえに、イエスの自殺は、クリスチャンたちによって、全面的に肯定される。

こういう言い方が癪に障る方もいるだろうが、結果的にイエスは、自殺によって天国に上り、自殺によって神と隣り合わせの王座に座ったのである。

そうであるならば、つまり愛を表明するための自殺、愛ゆえの自己犠牲であるならば――それはイエスの言葉と行為により予め「宗教的に許されている」と私たちは考えることが出来る。

ただ愛のために

もっと、この問題の本質を凝縮して語ることにしよう。

そうしてみると、私たちが今ここで求めるべきは「愛の一元論」なのである。すべての事象を、愛を論議の頭（かしら）にして秩序づける一元的な思想なのである。

すなわち、愛のために「生きなければならない」ならば、彼はどんなに辛くても、そのとき生き永らえなければならない。愛のゆえにそうしなければならない。

逆に、愛のために「死ななければならない」ならば、彼はどんなに怖くても、そのとき死に逝かなければならない。愛のためにそうしなければならない。

結局そういうことなのである。私たちの使命は、つまるところ、ただ世界に愛を満たすことだけなのだ。

したがって、愛のために行われることならば、それにどんな醜名が付されようとも、すべては神に肯定される。逆に、愛ならざることのために行われることならば、それにどんな美称が付されようとも、すべては神に否定されるのである。

たとえ自殺と呼ばれようとも

愛とは、他者のために自分の誠意を尽くすことである。愛ならざることとは、自分のために他者を利用することである。

もっとも、こうした直截的な表現で覆い尽くせるほど、世界の有り様は単純ではない。それについては、私も、もちろん承知している。

たとえば、自分を成長させるために、どうしても他人を利用しなければならない場面もあるだろう。親に学費を払ってもらうとか、研究のために国から援助してもらうとか。

そのようにして、自分のために他人を利用することは、それが自分の「器」を大きくする場合にのみ肯定される。

この器は、彼を通して、世界に愛を運搬するための器であり、彼を通して、世界に愛を注ぐための器である。人間は精神的、社会的に成長して、このような器を創り上げる権利と義務とを持っている。

しかしながら、認知症の老人たちは、このような「自分を成長させること」への機縁を、根本的に失ってしまっている。

彼らは、ただ垂れ流しのように「自分のために他人を利用する」。言い換えれば彼らは、何も分からないまま「自分のために他人に介護を強いる」のである。

したがって、自分自身による決断は、そのようになる前に下さなければならない。

つまり私たちは、認知症になる前に「認知症になったならば、どうか私を安楽死させてください」と言い残すべきなのである。

たとえこれに「自殺」という醜名が付くとしてもだ。

若者たちに向けた自己犠牲

結論として「この世で、未だ長き社会生活を全うすべき若者たち」のために、老いた私たちは、自らの死を受け入れなければならない。それは確かに自己犠牲的な愛となるのだから。

たとえ死を恐怖しようとも、愛の一元論を根本原理にするならば、私たちはどうしてもそのようにしなければならない。むろん、本来的には、死は何ら恐れるべきものではないのだけれども。

そして、このように言うからには、私は安楽死による自殺をして、これを「無条件に悪いこと」などとは決して言わない。それは名称（自殺というレッテル）に囚われているだけの状態であって、本質的な問題に臨んでいる状態ではないからである。

本質的な問題は、それが誰がための死か、という問いかけである。他者のための死（自己犠牲＝愛）なのか、自分のための死（現世逃避）なのか、ということである。

よい機会だから言っておこう。

万事、それが良い事か悪い事か迷ったときには、あなたはそれを、ただ「愛の一元論」に当てはめて考えてみてほしい。ただただ愛に基づいた答えを探してみてほしい。その答えが、あなたの行く先を照らすヘッドライトとなるだろう。

第七部

第21章　残酷性の自覚

世界の半分は残酷で出来ている

これまでの叙述に接してきて、書き手である私のことを「残酷な人間だ」と感じた読者も多いことだろう。中には「いったい老人の命を何だと思っているのだ！」と本気で憤っている方もいるかもしれない。安楽死を勧めるなど、あまりにも残酷だ、と。

だが現実を振り返ってみれば、世界の秩序の半ばは、この「残酷」で出来上がっているのではないだろうか。

というのは――前に少しだけ触れたが――私たちは、モノを食べることによって、自分たちの命をつないでいる生き物であるからだ。

そんなことは当たり前だし、そこに何の残酷性があるのかと、逆に訝る読者もあるだろう。

しかしながら、その「食べる」という行為の根底にあるものは何か。これを虚心に考えてみてほしい。そうしてみると、それは実のところ「自分よりも弱い立場にあるものの命を奪うこと」ではないだろうか。私たちが摂取する食べ物の多くは、まさしく「それまで生きていたもの」に他ならないのだから。ならば、これをもって「小さな戦争」であると解釈することも出来る。しかもそれは、きわめて一方的な、相手に有無を言わさぬ侵略戦争である。私たちは食べることによって、日々、この残酷きわまりない「侵略戦争」を黙々と行っているのである。

この言葉に、よりリアリティを感じるためには、

「ある日、強大な宇宙人が攻めてきて、われわれ地球人を『食料』として捕食しはじめた」

とでも想像すればよいだろう。

すなわち、科学力に差がありすぎて、私たち人類には手も足も出ない。そのとき私たちは、ただ宇宙人に食べられるしかない、というシチュエーションだ。

私たちは無残にも、彼ら宇宙人によって、切られ、焼かれ、茹でられ、調味料をかけられて料理される。ときには新鮮な刺身として、踊り食いにされるかもしれない。

これはまさに侵略的な宇宙戦争の一コマであり、残酷な地獄絵図であろう。私たち人類にとっては、決してあってはならないことだ。

けれども、わが身を振り返ってみれば、宇宙人ならざる私たちもまた、右と同じことを、たしかに地球上の動植物に対して行っているのである。

植物を食べることの残酷性

あらためて見てみよう。私たちが食べるのは、主に植物と動物である。

そして、もともと私たちは「優しい感受性」を持っている。それは一輪の花を摘むにも、そこに花の命を奪っていることへの後ろめたさを感じるような「優しい感受性」である。

とりわけ自分のことを「優しい人間である」と信じているような人ならば、この程度にナイーブな感受性は、間違いなく持ち合わせていることだろう。

ところがだ。他面において私たちは、きわめて日常的な「食べる」という行為の中で、一輪の花を摘むことの何十倍もの規模でもって、同じような植物たちの命を奪っていることを恥じないのである。

たとえば植物を煮ることは窯ゆでの刑のようなものであるし、それを歯で噛むことは、植物をギロチンの刑に処するにも等しい。相手の身になって考えてみたら、こんなにも迷惑千万な話もあるまい。

もしかしたらあなたは、それが花のように可憐な形姿を持っていないから、ただの緑色の葉や、ただの白い粒であるから「別に可哀そうとも思わない」と言うかもしれない。

だがそれは「可愛い女の子や、格好のいい男の子でなければ、人が殺されても、私はそれを可愛そうとは思わない」と言っているのと同じではないだろうか。

あるいは、白人が殺されるのは許せないが、黒人が殺されるのは構わない、という人種差別主義者の思想にも似ているだろう。

まことにそうなのだ。花の命が奪われるのが可哀そうならば、草や木の命が奪われるのも、同じように憐れんでやるべきなのだ。

しかし、そのように順当な憐れみをかけてやることもなく、私たちは日々、植物たちの命を奪っている。食べることによって、彼らへの処刑を、毎日執行しているのである。

これを残酷なことだといって、そこに間違いがあるだろうか。

動物屠殺の残酷

一輪の花と同様に、私たちは牛や豚、鳥や魚たちも、進んで殺したいなどとは思っていない。牧場や海辺で接する動物たちは、まことに愛くるしいからだ。

こうした動物は、そのとき人間の友達になっている。というより私たちは、人間に害をなさない動物に関しては「同じ生き物としての仲間意識」をもって、これを見てしまう。

だから動物園や水族館でディスプレイされている生き物を「旨そうだな」と言いながら眺める観客は、きわめて少数派であるはずなのだ。

しかしである。では消費者から見えないように、恐ろしく〝社会的に〟厚い壁の向こうで行われている「屠殺」とは何だろう。それは、仲間であるはずの動物を、きわめて冷酷に殺戮する営為なのではないだろうか。

一般に屠殺とは、家畜を、食肉や皮革などにするため屠る（ほふる＝殺す）ことを言う。したがって屠殺場では、強い人間が、弱い動物たちを、まさに自分の目的を果たすために、殺しまくっているのである。

仮に、厚い壁を取っ払って、直接その情景を見せてもらえるようにしたら、どうなるか。想像はつく。私たちは、その残酷性に、それこそ脳天を割られるようなショックを受けることだろう。

屠殺場の実際（一例）

ここで文章を通してだけでもいいから見るがいい。

私たちが牛肉を得るためには、牛たちは、空気銃を眉間に打ち込まれて失神しなければならない。そして、そのあと逆さ吊りにされ、首元を切られて失血死しなければならない。

豚肉の場合は、電気ショックによる失神のあと、即座に胸元を切られる。とにかく早いこと傷口から血を流出させなくては、肉の味が悪くなってしまうからだ。

鶏肉にいたっては、麻酔ガスを吸わされたあと（ただし、これも使用されないことがあるらしい）、プロペラのような刃でもって首チョンパである。しかも、上手に首が切れなかった鶏に至っては、そのまま窯ゆでにされてしまう。

もうお分かりだろう。昨今、犬や猫などの動物虐待のニュースが取り上げられるが、何のことはない、屠殺場では、毎日のように、動物の虐待と殺害とが行われているのである。

牧場や海辺では友達だった動物たちが、屠殺の現場では、私たちの食糧となるために、あからさまな虐待と殺害を受けている。

これを残酷なことだといって、そこに間違いがあるだろうか。

呪われた存在

しかし、何よりも腹にこたえるのは、この残酷な現実を受け入れないかぎり、私たちの肉体は、ものの一週間も、その生命活動を保てないという、冷厳たる事実であろう。

もしこの残酷性をもって「悪なるもの」として考えるならば、私たちはまさに「呪われた存在」に他ならない。

動物たちからすれば、私たちは残虐モンスターのような存在であろう。彼ら動物たちは、本当に私たちを呪いながら死んでゆくのかもしれない。

さりとて、いや、だからこそと言うべきだろうか。私たちの精神は、かかる事実に直面することに、とうてい耐えることが出来ない。

そこで私たちは、スーパーの陳列棚に置かれた、トレー入りの牛肉、豚肉、鶏肉の向こう側を、出来うる限り見ないようにしている。

つまり、消費者である私たちと、屠殺場との間に、限りなく分厚い「社会的な壁」を設けているのだ。

そうして一切の「呪い」を感じないようにしている。

かくして私たちは、見たくないもの、感じたくないものを、屠殺場で働いている人たちに一任してし

まっている。

日本人は「自分の手を汚さない」ことが大好きである。だから「ケガレ仕事」と思っていることは他人にやらせ、しかもその恩恵を受けても感謝せず無関心である。

井沢元彦『逆説の日本史・近世暁光編』より

私たちの欺瞞、偽善

これまで見てきたように、私たちは「屠殺によって食肉を得る」という現実の中に生きながら、その現実を徹底的に隠蔽しながら生活している。

そして、そのうえで平然と、ペットの動物たちを可愛がるのだ。動物の命という点では、牛や豚の命も、犬や猫の命も、何も変わらないというのに。

ここに、植物のときにも出てきた、人間の身勝手な差別主義が現れている。なにしろ、ペットの動物が死ぬのは可哀そうだが、牛肉や豚肉、鶏肉を食べるのは、当然のことだと思っているのだからである。

これは動物界全体を眺めたとき、差別主義以外の何になるのだろうか。

正直に言って「ペットを可愛がっている私は優しいでしょう」とアピールしている人間を見ると、私は混乱さえ覚えてしまう。

憚りながら申し上げるが、それは欺瞞であり偽善である。認知症の老人を「可愛いから好き。もっと長生きしてほしい」と言っている人間と同じぐらい、浅慮で欺瞞的で偽善的な人間の姿を示したものである。

だから、もう私たちは自分を欺くのをやめようではないか。私たちは、自分が極めて残酷な存在であり、芯まで呪われた存在であることを認めようではないか。

そのほうが、現実に目を背けたままで発信する優しさ（偽善）よりは、よほど正常に近い精神状態を保てるはずだ。

第22章　ボトムアップ型の宗教

呪いに抗うために

前章で確認したように、私たちは残酷な存在であり、呪われた存在である。

しかし、そのことを認めただけでは、私たちは、後ろ向きの人生しか送れなくなってしまう。そのような暗い人生を送ることは、きっと神も、私たち人間に望んではいないだろう。

ではどうすればよいか。

私はここで一つの試みに挑んでみたいと思う。それは「残酷で呪われた存在」である私たちが、それでも肯定的に生きるための思想、宗教を構築するというものである。

もっとも、それは「宗教教団を作る」といった具体的なものではない。そうではなく、あくまでも、私たちの頭の中に「理念的な宗教像」を拵えるのである。

それは言い換えれば、

「『残酷で呪われた存在』であっても肯定的に生きなければならないというなら、そのとき私たちは、どのような内容の宗教を要請しなければならないか」

について、考えを巡らすということでもある。

例外的な形式

つまりこれは、ボトムアップの形式で、宗教を生み出すということだ。

もっとも、これは相当にイレギュラーな試みである。基本的に宗教というものは、トップダウンの形式でもって、生み出されるものであるからだ。

トップダウンの形式――つまり、まず神という至高の存在（トップ）があって、その高みから預言者に、問答無用の「啓示」が降される（ダウン）。預言者（神の言葉を預かる者）は、その啓示内容を人々に伝えていく、と。

これが宗教創設の基本形式であるが、ここでは思考実験として、それと逆のことをしてみたいと思うのである。つまり「下から上へ」の流れを描いてみたいのだ。

すでに人々の「困難と要請」は明確になっている。自分たちが「残酷で呪われた存在」であるということ。しかし、それでもなお肯定的に生きたいと願っていることだ。

このような「困難と要請」が底辺（ボトム）にあるとき――「それを解決するためには、どのような宗教教義を立てるのが適切であるか」について、出来るだけ人間心でもって検討してみたいのである（アップ）。私はそのように思っている。

このような検討は、宗教教義の創出方法としては不遜であるし、また邪道でもあろう。だが、一時の思考実験としてなら、充分許容されるだろうし、またその検討の結論もまた興趣ぶかいものとなると思う。

転生輪廻を受け入れる

そうしてみると「残酷で呪われた存在」である私たちが、それでも肯定的に生きるための宗教教義として、私からは三つの案を提示することが出来る。

それは前章までに語ってきた内容と重なる部分が多いが、語り口を変えたものとして、どうか今一度聞いてほしい。

ではまず一つ目から行こう。「残酷と呪いを逃れるための宗教づくり」に必要な教義の第一――それは転生輪廻システムが存在するということの肯定である。つまり私たちが「転生輪廻は絶対にあるのだ」と無条件に受け容れるべきだということだ。

換言すれば、私たちは転生輪廻を肯定することによって、私たちの命が、動植物を含めて「死んだら無になる」という考えを、完全に払拭すべきなのである。

そうすれば、私たちが屠殺し摂食した動植物たちの命は、死後さしあたって「霊界における新しい存在様式」を獲得することになる。そしてさらには、何らかの過程を経たのち、再びこの世界へと戻ってくることになる。

こうした世界観を持つことにより「摂食によって対象の命を奪うこと」への申し訳なさが――その全体をカヴァーするとは言えなくとも――一部は削減されることになるだろう。

少なくとも「摂食により、相手の存在を無にしてしまう」と考えるよりは、よほど私たちの気が安らぐはずだ。

自己犠牲という愛の行為

次に行ってみよう。「残酷と呪いを逃れるための宗教づくり」に必要なことの第二は、

「命を奪われるさい、その『食べ物』たちは、実は『自己犠牲という愛』を発現させるチャンスを与えられているのだ」と考えることである。

一見すると、食べ物たちは「不可避的に、強制的に、自分の命を供与せざるを得なくなった」ように見える。食べ物とは、つまり動物や植物のことだ。彼らを客観的に見れば、たしかに、恐ろしく悲劇的な立場に追いやられているように感じられる。

なにせ食べられるとは、イコール殺されることなのだ。よって、そのように悲劇的に感じられても仕方がないものがある。

けれども主観的には――この主観は、動植物にとっての主観である――それは、むしろ幸福な場面であるかもしれないのだ。

というのも、彼ら「食べ物」たちは、その命を投げ出したあと、その差し出した相手である捕食者（主に人間）のエネルギーとなり、その生命活動を支える礎となるからである。

これをして、動植物たちが「自己犠牲として」「愛の形として」自身の肉体を捕食者に捧げたものだと考えれば、それは自己肯定的で、きわめて積極的な意義を持つことになるだろう。

もっとも、このように話すと、読者には、ちょっと牽強付会な印象を与えるかもしれない。だが、これには似たような実例もあるのである。

たとえばタイ仏教で、民衆が、托鉢（乞食行為）にきた僧侶に、食べ物を捧げていたとしよう。

このときタイの民衆は、決してそれを「私たちは、僧に食べ物を恵んでやっているのだ」という風に

は思っていない。むしろ彼ら民衆は、そのシチュエーションをして、

「いま私たちは、僧によって、布施（愛）の行為をする機会を与えてもらっているのだ」

と考えているのである。そうしてこの布施の行為が、天の蔵に徳を積む（＝天国に行くためのチケットを得る）ことになると信じている。

動植物にも働くタナトスの機構

もちろん食べ物となる動植物たちは、自分が食べられることに対して、並々ならぬ恐怖と苦痛を感じていることだろう。直接彼らから聞いた訳ではないが、そうである可能性は非常に高い。

しかしながら、彼らの表面意識がそのように感じているとき、霊界に残っている彼らの深層意識（つまり人間の守護霊と同質のもの）は、きっと表面意識とは、全く異なった感覚を味わっているはずなのだ。すなわち霊界における「食べ物」たちの片割れは、そのとき自身の「自己犠牲による霊格の向上」を、心から喜んでいるはずなのである。

読者にあっては、どうか次のことを思い出してほしい。すなわち、霊界にいる人間の守護霊が、タナトスによって、現世にある被守護者を死なせようとする理由を、である。

その理由は、彼の被守護者が「自分のために周囲の人間を利用する立場」にあったからだった。それは自己犠牲や愛と呼ばれる「他者のために自分を捧げること」とは、まさに正反対と言える状況だった。

ということは、逆に、もしも被守護者が「他人のために自分を捧げる」状況を現出させていたならばだ。そのとき霊界にある彼の片割れ（守護霊）は、その状況に対し、諸手をあげて「そうだ、それでよい」と賛意を示すはずなのである。

つまり、食べ物となって捕食者のエネルギーに変換されることは、その自己犠牲的な様式のゆえに、動植物の守護霊（的なもの）にとっては、非常に嬉しく誇らしい状況となるはずなのである。

このような摂理が、現実世界の中で働いていると信じるならばである。そのとき私たち人間の「動植物の命を奪うことへの申し訳なさ」「残酷な自己像を背負う呪いの重圧」は、そうとう劇的に軽減されることになるだろう。

食べ物の生命を無駄にしない決意

そして――これで最後になるが――「残酷と呪いを逃れるために必要な宗教教義」の第三は、私たち人間が、食後、次に示すような決意をすることである。

「私たちは、動植物から捧げられた愛（自己犠牲）を、決して無駄にはすまい。

むしろその愛を、彼らがくれたエネルギーを、私たちの人生のなかで『人間としての愛の行為』として昇華することを誓おう。

言うなれば、頂戴した動植物の命を、自分の生きざまによって、より大きな愛として、この世界に行

き渡らせるのだ」

このように決意して生きること。そうして生き抜くこと。

それによって、私たちに課せられた「相手の命を奪うことへの申し訳なさ」は、あらかたキレイに清算されることになるだろう。そして「残酷な自己像を背負う重圧」もまた、ほとんど跡形もなく消えてしまうことだろう。

結局のところ、ここでもまた私たちは、あの「愛の一元論」のうちに、自分たちの本当の生き筋を見出すことになるのだ。つまり私たちは、自分の存在そのものを、愛の権化にしようと努力すればよいのである。

トップダウン的確言

私たちは、自分の存在そのものを、愛の権化にしようと努力すればよい――

それが私たちの存在全体を貫く答えであるならばだ。その一環として、もはや自分がこの世を去ることが「＝愛」となるような老境を迎えた時には、私たちは自己犠牲の表明として、若い世代のために、自身の生存を謹んで差し出せばいいのである。

このような言葉を、読者は、こじつけめいた極論だと思うだろうか。

しかしながら、私はこの自分の考えに確かな自信を持っている。なぜなら、この結論は、トップダウン形式によって、神から下された霊的啓示だからである。

なお、これまでの話において、もっとも大切な前提となるのは「命が死後にも永続する」という設定である。この設定が崩れれば、私の提案など、そのすべてが意義を失ってしまうだろう。

だが私は、ここでも自信をもって「命は死後も永続する」ということが真実であると断言する。この考えが、かの「死んだら無になる」という思想の幾百倍、幾千倍も、自然の摂理に則っていると断言する。

そして、そのように断言する理由については、次章で詳らかにすることにしよう。

第23章　円柱と半円柱

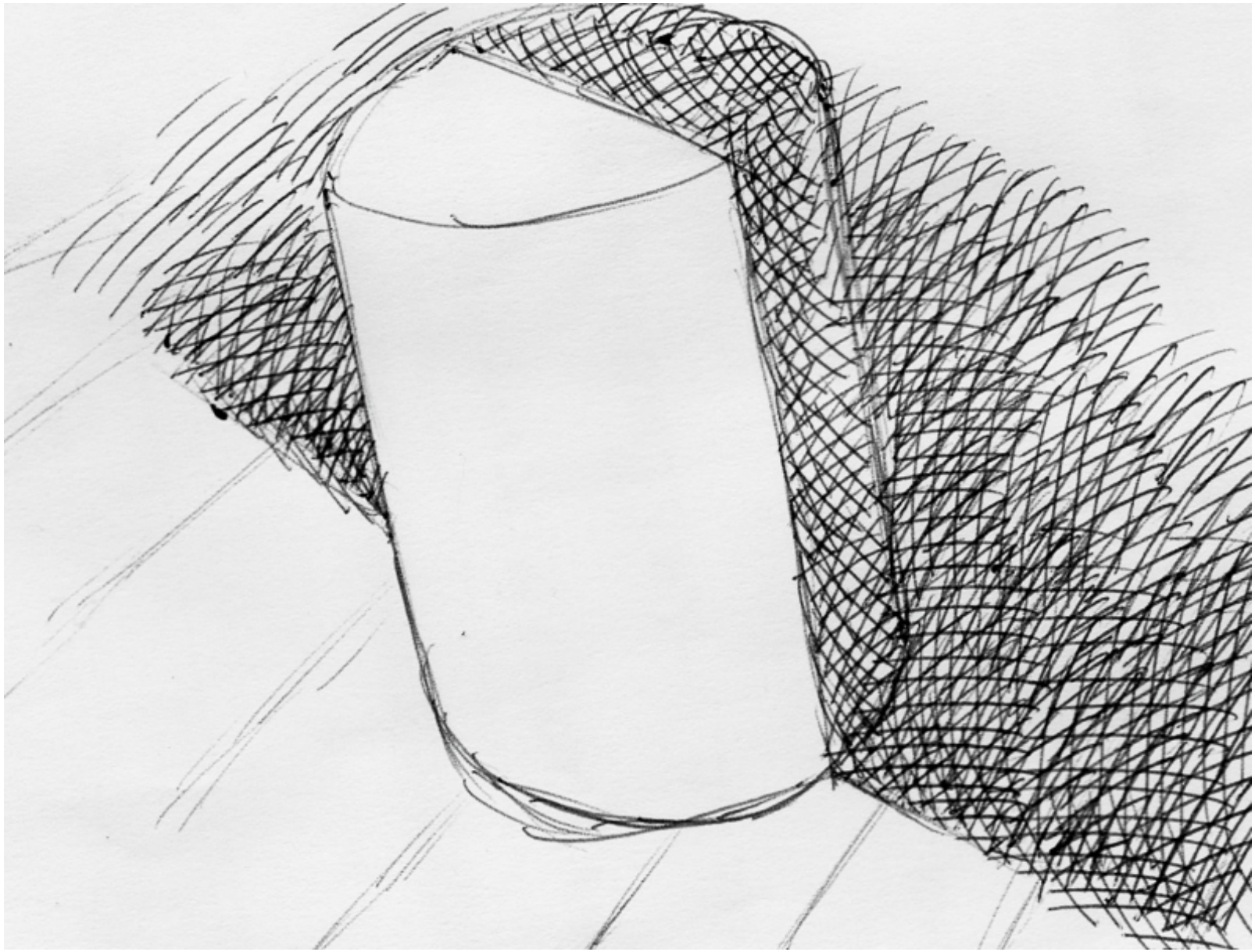
隠された後ろ半分

「命は死後も永続する」という考えが、「死んだら無になる」という思想の幾百倍、幾千倍も、自然の摂理に則っているということ。

それは、譬えてみればこういうことだ。

とあるステージに、立体の後ろ半分を隠してしまう「暗がり」があったとしよう。
このステージに誰かが「円柱」を立て置いたとする。しかし、暗がりがあるため、その円柱の後ろ側は見ることが出来ない。

2024-01-22.png



次に、ステージ上に風を送ってみる。それなりに強い風であるが、円柱は倒れなかった。読者の皆さんには、こういう場面を想像してみてほしい。

このとき、円柱の形をして、どう考えても不自然な「かまぼこ型の柱」つまり半円柱として想定してしまうのがマルクス教の信徒たちである。

マルクス教の教徒とは、無神論、唯物論、無霊魂説の信奉者であり、人が死んだら無になると考える人たち全般のことだ。そんな彼らは、前述の設定のなかに、半円の断面をもった柱の形を想定してしまう、と。

しかしながら、これは本当に不自然なことだ。なにしろ、見えている立体の輪郭は、明らかに弧を描いているのだから。

たしかに暗がりのため、その弧は途中で途切れているだろう。けれども慣性の法則は、この弧が、それまでと同じ曲がり具合で、その先も延長していくことを求めているのだ。

慣性とは、今ある運動の向きや速さを、そのまま維持し続けようとする性質のことである。

そうして延長していった弧は——不可視ではあるが慣性的に想定される一点で——ごく自然に円を描くことになる。そうして円柱という立体を浮かび上がらせることになるのだ。

いびつな立体

ところがマルクス教の信徒は、同じステージを眺めながら、とにかく「暗がりによって後ろ半分が見えない」という事実だけを重要視してしまう。そして、

「見えないものは無いと考えること、それこそが実証主義というものだ」

とばかりに、躊躇うことなく思考停止に入る。そうして最終的に、

「こうして見えないのだから、イコール暗がりの先は何もないのだ」

という断定的な答えを出してしまうのである。

こうして彼らの理念上で作られるのが、後ろ半分が削られた半円柱である。

だが、このような半円柱であっては、風が送られたとき、後ろ向きにパタンと倒れてしまうだろう。つまり、彼らの理念では、前提条件を満たすだけの均衡を保てないのだ。ついでに言うと、それは立体美としてもいびつである。

この「半円柱では、後ろ向きに倒れてしまう」というのは、本来的な議論にあっては「いくら可哀そうでも、動植物を食べなければ私たちは餓死してしまう」「老人を延命させれば現役世代が疲弊する」という事態に相当するだろう。

しかし、マルクス教徒は、そういった不都合に関しては「見ざる聞かざる言わざる」でしか応じない。というより彼らは、そういう不都合には「気づかないふり」で通してしまうのである。

これは、そのような半円柱を形成する者の「知性のバランスが取れていない」ということの証左でもある。このような知性が主張することを、私は到底承服することが出来ない。

円柱が象徴する理念とは

たとえ死を境目にして始まる暗がりがあっても、その先に「見えない後ろ半分が存在する」と想定する。そのように考えてこそ、私たちは、風に吹かれても倒れない、バランスのとれた立体を、理念上で形成することが出来るようになる。

それは要するに「生まれては死ぬ」という目に見える事実を、「死んでは再生する」という見えない理念で補完することである。

換言すれば「死後も生命は永続する」と考えること。そして「そうやって永続する生命が、転生輪廻によって、霊界と現世を循環的に体験する」と設定するということだ。

この考えがあってこそ、私たちはタナトスの促しに従順となれるし、心理上の健康を保ちながら「食べる」という行為を継続することが出来る。これが、円柱が象徴している「バランスを保っている思考」である。

他方、半円柱が象徴する「バランスを欠いた思考」であっては、決して「残酷さの呪い」は克服されない。

この思考に忠義だてする限り、私たちは「呪い」を背負いつつも、その呪いから目を逸らしながら　ら、偽善的な優しさに身をやつすしかなくなるのだ。

これは一方では「殺すのは可哀そう」と言いながら、その実「他者（食べ物）を殺さなくては生きていけない自分たち」に目をつぶる生き方である。

そしてまた一方では「老人が死ぬのは可哀そう」と延命を施しながら、他面において、若者たちの活力を吸い尽くす、老人介護制度の在り方でもある。

このような生き方を是しとするのか。このような在り方を是しとするのか。今のままでよいのか。私はそれを読者に問わずにはいられない。

それは結局のところ、読者が個々に出さなければならない「答え」である。

とはいえ「命は死後も永続する」という考えは、「死んだら無になる」という思想の幾百倍、幾千倍も、自然の摂理に則ってはいないだろか。

第24章　贈る言葉

残酷に見えても真実は真実

我ながら、大変ショッキングなことを語ってきたものだと思う。現代における一般的な倫理観からすれば、私が言っていることは、非常識この上ないことですらあるだろう。

しかしながら、本書で語ってきたことは、私にとっては明白に「神からの啓示として与えられた内容」なのである。私には、間違いなくそうであるという霊的確信がある。

顧みれば、二千年前の預言者であるイエス・キリストも、当時の一般的な倫理観からすれば、非常識極まりないことを表明した。すなわち彼は、当時のユダヤ社会の常識であった「神殿の尊重」「律法の尊重」を徹底的に否定したのである。

といってもイエス自身は、むしろ自分を、神殿の守護者、律法の完成者として位置付けていた。だからこそ彼は、人々に神殿における、真なる「神への真摯な向き合い方」を教えようとした。

それが形になったのが、いわゆる「宮清め」である。この宮清めというのは、イエスが、神殿から商人たちを追い出した、一連のデモンストレーションを指している。

そしてまた彼は、真の「律法の精神」を守るために、幾度となく安息日の規定を破った。イエスは「文字面の規定よりも、文字の奥にある良識のほうが大切である」と人々に教えたかったのである。

とはいえ、それは頑迷なユダヤ人たちには「単なる神殿の否定」「単なる律法の否定」にしか見えないことだった。まことにそうだった。それだからイエスはユダヤ社会から吊るし上げられ、最終的には十字架に架けられてしまったのである。

結局、イエスの考えが理解者を得るのは、彼の死後のことだった。

怯まず、臆さず

そんな不遇なイエスを哀悼しながら言おう。私もまた、自分が言っていることが、日本社会から見れば、非常識極まりないものであることを重々知っている、と。

きっと私が本書で言ってきたことは「いのちへの不敬」「生の尊厳への不敬」と捉えられることだろう。

それでも私は、愛の一元論と、有神論的宇宙の摂理を守るために、タナトスの働きを肯定しなければならなかった。「絶対的な生の肯定」が生み出す優しさを「大淫婦バビロン」と呼んで、これを倒壊させなければならなかった。

このような私の姿勢が、多くの日本人にとっては、単なる不敬、単なる残酷としか目に映らないのは、ほぼ確実なことであると思われる。

しかし怯むまい。臆すまい。神の摂理につながらない、マルクス教的な「優しさ」は、とどのつまり、社会と世界を、機能不全にさせる結果しか生まないからだ。私には、それを阻止する義務がある。

よって、あとは読者の側による是非の判断に任せるしかあるまい。

三つの言葉

私からは、最後に皆さんへ三つの言葉を贈ろう。

一つ目は、若者世代の「生の声」であり、二つ目は、思想家ルソーの言葉。そして三つめは、私自身か

ら若者たちに贈るメッセージである。

一つ目の「若者世代の生の声」というのは、いま高校三年生である娘の「同級生」の言葉である。少し詳しく言うと「政治経済の授業のときに、クラスの男子が発言した言葉」なるものを、ふとした時に、娘が私に教えてくれたのだ。それを皆さんにも伝えたいと思う。

何でも、その授業では「日本の人口と高齢化」が話し合われていたらしい。そして、その授業内容を受けて、ある男子生徒が次のような不満を口にしたという。

先生、なるべく早く老害は消えたほうがいいと思います。

だって、あいつら〔たいした病気じゃなくても〕すぐに病院にいきやがるじゃん。〔実費で払うぶんが少ないから〕本当にすぐに行くんだ。それで税金が高くなって、そのぶん俺たちが苦労することになる。

このあまりにも不遜なものの言い方には、私もさすがに呆れてしまう。しかし内容だけを見るならば、私はこの生徒の言っていることに、賛意を示さざるを得ない。

というのも、ここには明らかに「老年世代における生への絶対的肯定」の弊害が現れているからだ。しかも、その弊害によって圧迫されている、若者たちの苦悶さえもが現れている。

そのように見るならば、彼の不遜きわまりない物言いもまた、若者たちが味わっている閉塞感が生み出した、やむを得ない負の副産物だというふうに思えてくる。

私たちは、この若者世代の閉塞感と苦しみに、本腰を入れて向き合わなければならないのではないか。私はそのように思うのである。

ルソーの言葉

二つ目の「送る言葉」は、十八世紀の思想家であるルソーの言葉だ。

私は彼の主著である『エミール』を読んでいたのだが、本書の執筆中に目を通していたページに、まるで私たちへのプレゼントのような一節があったのである。

それは要約すれば「自然の摂理を受け入れるためには、私たちの『人間的な寂しさ』は克服されなければならない」といった内容である。したがってそれは、タナトスを受け入れるべき私たちの「これから」を照らす指針ともなるだろう。

もちろんルソーは、現代における老人介護問題を念頭に置いていた訳ではない。

しかし、ここでの彼の文章は、不思議なぐらい、私たちへの直接的なメッセージとして機能することになるのだ。となれば、これはちょっとした共時性現象（運命的な偶然の一致）の一例なのかもしれない。

ともあれ、ではルソーの言葉を直接聞いてもらうことにしよう。

さしあたっては、まずは読みやすいよう、私からルソーの大意を示すことにする。つまり意訳ということだ。

そして読者には、本章の末尾において、ルソーの原文に接して頂くことにしよう。もっとも原文と言っ

ても日本語訳版（今野一雄訳・岩波文庫）ではあるのだが。

『エミール』第五編より（意訳）

私たちは、死すべき存在であり、いつかは滅び去る存在である。
そんな存在である私たちが、この地上において「永遠の絆」などを作ろうとするべきだろうか。すべてが変わっていき、過ぎ去っていく、この地上において。
私たちが愛しているものもすべて、遅かれ早かれ、私たちから遠ざかっていく。
ところが私たちは、それが永続するものであるかのように、これに執着している。そして、その執着が不安を生む。
しかし、そうした「すべてを失いはしないか」という心配は、むしろ、私たちが欲しいと望むものを、何一つ自分のものにさせないことになる。
それは、その不要な心配が、私たちの心を、錯覚の牢獄に閉じ込めてしまうからだ。
あえて訊こう。君は本当に、あの人がいつまでも生きているものと思っていたのか。あの人の年頃で死ぬ人がいないと思っていたのか。
そんなことを思っていたとしたら、あまりにも馬鹿げてはいまいか。冷静になれば、それが錯覚であるのは明らかなのだから。人間は結局のところ、いつ死んでもおかしくない存在なのだから。
少なくとも私たちは、いつか死すべき存在であり、いつかは滅び去る存在なのである。

ところで、いくら優しく見えようとも、単に善良である人間は、その人自身にとって善良であるのに過ぎない。
では逆に「有徳な人」とは、どういう人を言うのか。
それは自分の愛情を克服できる人だ。愛情を克服すれば、その人は、自分の理性と良心に従うことになるからだ。
そのとき彼は、自分の義務を果たし、それによって正しい秩序のうちに留まる。もはや何者も、彼をそこから逸脱させることは出来ない。
そして、そのとき自然は、私たちに与えている苦しみから、私たちを解放してくれる。あるいは、苦しみに耐える術を、私たちに教えてくれる。

ところが自然は、私たちが「自身の錯覚によって発生させる苦しみ」に対しては、何も教えてくれない。むしろ、そのとき自然は、私たちのするがままに任せるのだ。そうして私たちが情念の犠牲になって、むなしい苦悩に屈服しているのを、ただ遠くから見ている。
さらに自然は、私たちが本来は恥じるべき涙を流しながら、それをかえって名誉に思っている姿を、じつに皮肉な眼差しでただ黙って眺めている。
しかしそれは、決して自然が意地悪なのではない。自然の摂理を逸脱している自分たちを顧みれば、む

しろ「そうなっても仕方がないこと」なのである。

そもそも自然は、べつに難しいことを要求している訳ではない。

自然が私たちに禁じているのは、私たちが、自分の愛着を「私たちの限界よりも遠いところ」まで広げることだけなのである。理性が私たちに禁じているのは、私たちが「決して獲得できないもの」を得ようとすることだけなのである。

そうした臆見さえ放棄できたならば、私たちは正しい秩序のうちに、簡単に留まることが出来よう。

そして、そのような「人を騙す臆見」を克服したならばだ。君はさらに、この世に――究極的には間違っている――なのに大きな価値を与えている、もっと根本的な臆見をも、克服することが出来るようになっていることだろう。

つまり君は、どんなことにも執着しないようになるし、人生そのものにも執着しないようになるのだ。

それは具体的にはどういうことか。

ほかの連中は、死ぬまぎわ、恐怖に捉えられながら「この世を去ることは、もはやどこにも存在しなくなることだ」と考えるかもしれない。

しかしそのとき、この世のむなしさを知っている君は、むしろ「自分はこれから人生を生き始めるのだ」と考えるはずである。

まことに死は、悪人にとっては自己存在の終焉に感じられることである。

だが自然の秩序のうちに住まう「正しい人間」にとっては違う。彼にとって死は、逆に、新しい霊的人生の始まりの時となるのだ。

――以上がルソーによる私たちへの「贈る言葉」である。

最後のメッセージ

最後に掲げるのは、私から贈る、若者たちへのメッセージである。

まだ齢若き者たちよ、君たちの目には、本書の内容が「無条件に自分たちに味方するもの」として映ったかもしれない。もっとハッキリ言えば、私が老人を敵視する者であり、逆に若者には阿諛追従する者に見えたかもしれない。

しかし私は、そのような贔屓じみたことをしているつもりはない。私は、ただ純粋に、有神論の宇宙を貫く摂理について語っただけなのである。

それを証明するためには、きっと次の言葉を掲げるだけで十分であろう。

「若者たちよ忘れるな、君たちもまた、やがては老人になるということを」

すなわち宇宙の摂理下にあっては、若者たちも老人たちも「やがては時の中で同一のものとなるもの」あるいは「束の間だけ離れた、二つの点」に過ぎないものなのである。

私は本書において、老人たちの醜い部分を、必要以上にあぶり出してしまったかもしれない。その醜

さを見て、若者たちは、幾分か攻撃的な気持ちになったかもしれない。

しかし実を言えば、その醜い老人たちの姿は、君たち若者の未来の姿なのである。もちろん、今、それをリアルに想像することは大変難しいだろうけれども。

愛の体現者としての老人

本当に難しいことではあろう。しかしながら、きっと君もそのうち言うのだ、

「自分が三十歳になるなんて想像もしなかったのに、このとおり三十歳になってしまった」とそう。そしてまたすぐに、

「自分が四十歳になるなんて想像もしなかったのに、このとおり四十歳になってしまった」

「自分が五十歳になるなんて想像もしなかったのに、このとおり五十歳になってしまった」

とも言うことになる。そしてついには、

「自分が八十歳になるなんて想像もしなかったのに、このとおり八十歳になってしまった」

と言うことになるのだ。そのようにして、君たちはあっという間に老年期を迎えることになる。

したがって、私が本書で提起した問題は、遠からず君たち自身の問題ともなるのである。

願わくは、そのとき老人になった君たちが、自己犠牲の何たるかを知る「愛の体現者」となっていることを。いや、それは「もしもその時まで、老人介護の問題が残っていたとしたならば」ではあるが。

私としては、何十年か後には、日本の人口ピラミッドが、底辺に重心を置いた、安定した形状に戻っていることを祈っている。

そして同時に、介護用のロボットが進化、汎用されることにより、介護という営みが、国民の負担であることを、大方逃れていることを祈りたいと思う。

『エミール』第五編より（原文）

死すべき存在、滅び去る存在であるわたしは、すべてが変わっていき、過ぎ去っていくこの地上にあって、自分もそこからあしたにも消えていくこの地上にあって、永遠の絆をつくりあげようなどと考えるべきだろうか。

わたしたちが愛しているものもすべて、おそかれはやかれわたしたちから遠ざかっていく。ところがわたしたちは、すべては永遠につづくことになるかのようにそれに執着している。

きみは、あのひとはいつまでも生きているものと思っていたのか。あのひとの年ごろで死ぬ人はいないのか。

すべてを失いはしないかという心配はなにひとつ自分のものにさせないことになる。

たんに善良であるにすぎない人間はその人自身にとって善良であるにすぎない。有徳な人とはどういう人か。それは自分の愛情を克服できる人だ。そうすればその人は自分の理性に、良心に従うことになるからだ。その人は自分の義務をはたし、正しい秩序のうちにとどまって、なにものもかれをそこから逸脱させることはできない。

自然はわたしたちにあたえている苦しみからわたしたちを解放してくれるか、それとも、それに耐えるすべを教えてくれる。しかし自然は、わたしたち自身から生じてくる苦しみにたいしては、なにも教えてはくれない。わたしたちが自身のするがままにまかせ、わたしたちが情念の犠牲となって、むなしい苦悩に屈服し、さらに、恥じとしなければならない涙を流してそれを名誉に思っているのを黙って見ているのだ。

自然によってわたしたちに禁じられているのは、わたしたちの愛着をわたしたちの力よりも遠いところにひろげることだ。理性によってわたしたちに禁じられているのは、わたしたちに獲得できないものを望むことだ。

人をだますいろいろな憶見を克服したきみは、さらに、この世に大きな価値をあたえている臆見を克服することになる。どんなことにも執着しないように、人生にも執着しないことになる。ほかの連中が、恐怖にとらえられ、この世を去ることによって存在しなくなるのだと考えるとき、この世のむなしさを知っているきみは、これから生きはじめるのだと考えるだろう。死は悪人の生の終わりだが、正しい人の生の始まりなのだ。

大淫婦バビロンの倒壊Ⅱ

著　者　　正道

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社